



木更津市峰ノ台貝塚発掘調査報告書

平成10年5月

財団法人 千葉県文化財センター

き さら づ し みね の だい かい づか はつ くつ ちよう さ ほう こく しょ
木更津市峰ノ台貝塚発掘調査報告書



序 文

千葉県には、縄文時代の貝塚が645か所以上確認されております。これらの貝塚は、房総半島の歴史を解明するうえで重要であるだけでなく、その発掘調査の成果は常に縄文時代研究に大きな影響を与えてきました。近年、全国各地での大規模な縄文時代集落遺跡の発掘調査によって、これまでの縄文時代観の大幅な見直しが進められていますが、このような動きの中でも房総半島の貝塚の重要性がますます高まっています。その一方で、このような重要な遺跡にも宅地や道路建設などの開発行為が及んでいることも事実です。

このため、千葉県教育委員会では、重要遺跡確認調査事業の一環として、県内の主要な貝塚の中で、とくに重要性の高いもの、開発などで失われる恐れのあるものについて、今後の保護・活用を図る基礎資料を得るために確認調査を行ってきました。

今年度は、木更津市にある峰ノ台貝塚の発掘調査を実施しました。峰ノ台貝塚は、貝塚研究において早くからその存在が知られ、注目されていたにもかかわらず、これまで発掘調査が行われたことはなく、その実態については明らかではありませんでした。今回の調査の結果、縄文時代後期の集落に伴つてつくられた貝塚であること、貝層の遺存状態が非常によいことなどが確認され、大きな成果をあげることができました。

このたび、調査成果をまとめ、刊行されることとなりました。本書が峰ノ台貝塚の保護・活用の一助として、学術資料としてはもとより、郷土の歴史を理解する資料としても、広く県民の方々にも利用していただけることを願ってやみません。

この事業の実施にあたっては、文化庁をはじめ、木更津市教育委員会、土地所有者、周辺住民の皆様など多くの方々に御協力いただきました。心から感謝申し上げます。

平成10年3月

千葉県教育庁生涯学習部
文化課長 岡野 孝之

凡　　例

- 1 本書は、木更津市矢那4.167ほかに所在する峰ノ台貝塚（遺跡コード206-016）の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている県内主要貝塚ほか遺跡詳細分布調査の一部で、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
- 3 発掘調査及び整理作業は、調査部長 西山太郎、南部調査事務所長 高田博の指導のもと、主任技師 加納実が下記の期間に実施した。
　　発掘調査 平成9年10月1日～平成9年10月31日
　　整理作業 平成9年11月1日～平成9年12月26日
- 4 本書の執筆は、主任技師 加納実が行った。
- 5 動物遺存体の分析・鑑定は、千葉県立中央博物館の小宮孟氏によるものである。
- 6 調査の実施に当たっては、木更津市教育委員会、及び土地所有者 平野廣、平野重之夫、平野重夫、平野良子各氏の御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
　　第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「木更津」(N 1-54-25-4-2)
- 8 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。

本文目次

| | |
|------------|----|
| Iはじめに | |
| 1 遺跡の位置と環境 | 1 |
| 2 周辺の遺跡 | 1 |
| 3 調査の経過 | 3 |
| II調査内容 | |
| 1 貝塚の状況 | 4 |
| 2 トレンチの状況 | 5 |
| 3 出土遺物 | 15 |
| (1) 土器 | 15 |
| (2) 石器 | 21 |
| (3) 動物遺存体 | 21 |
| 4 表面採集の状況 | 26 |
| IIIまとめ | 29 |
| 報告書抄録 | 巻末 |

挿図目次

| | | | |
|------------------------|----|----------------|----|
| 第1図 遺跡位置図 | 2 | 第6図 出土土器（1） | 16 |
| 第2図 1トレンチ・2トレンチ・3トレンチ | 6 | 第7図 出土土器（2） | 17 |
| 実測図 | | 第8図 出土土器（3） | 18 |
| 第3図 4トレンチ・5トレンチ・6トレンチ | 8 | 第9図 出土石器（1） | 19 |
| 実測図 | | 第10図 出土石器（2） | 20 |
| 第4図 7トレンチ・8トレンチ・11トレンチ | | 第11図 出土石器（3） | 21 |
| 12トレンチ・13トレンチ・14トレンチ | | 第12図 積長分布図 | 25 |
| 15トレンチ・16トレンチ実測図 | 10 | 第13図 表面採集地点範囲 | 28 |
| 第5図 9トレンチ・10トレンチ実測図 | 13 | 付図1 峰ノ台貝塚地形測量図 | 卷末 |

表 目 次

| | | | |
|----------------|----|------------|----|
| 第1表 トレンチ杭座標値一覧 | 3 | 第3表 出土土器集計 | 28 |
| 第2表 貝類遺存体同定結果 | 23 | | |

図版目次

| | |
|---|--|
| 図版1 遺跡周辺航空写真（1/1,000） | |
| 図版2 遺跡遠景・A貝塚現況・B貝塚現況・C貝塚現況・1トレンチ | |
| 図版3 2トレンチ・3トレンチ・5トレンチ・6トレンチ・7トレンチ・8トレンチ | |
| 図版4 8トレンチ・9トレンチ・10トレンチ・14トレンチ・15トレンチ | |
| 図版5 出土土器 | |

I は じ め に

1 遺跡の位置と環境

峰ノ台貝塚は、千葉県木更津市矢那4,167ほかに所在する。木更津市は東京湾東岸域の中央部に位置し、南は東京湾に突出する富津岬に近接する。市域の大半は、県内有数の河川である小櫃川をはじめとする大小の河川により開析された沖積地と、沖積地を望む上総丘陵とからなる。

峰ノ台貝塚は、東京湾に注ぐ矢那川中流域の南西岸に位置する。矢那川に通じる2つの谷にはさまれた幅約300mの台地縁辺部に形成された貝塚で、矢那川までの直線距離は約600m、東京湾までの直線距離は約4.3kmである。台地上の最高標高は約50.1mで、台地両脇の谷底の標高は約26m～29mである。

峰ノ台貝塚が立地する台地は、周辺の起伏のある台地と明らかに異なって平坦であることや、雛壇状の崖がいくつか認められるなど、古くから耕作のための台地整形がなされていたと考えられる。西側の谷底には比高差約6mの崖が認められるが、おそらく台地上を平坦に削平した際の土砂を谷頭部に運搬したものと考えられ、おびただしい量の摩滅した縄文式土器片が散布している。

近年、峰ノ台貝塚から直線距離にして約300mほどの地点に東関東自動車道が開通した。高速道路の開通に伴い、市街地の拡大や道路網の整備等により峰ノ台貝塚の立地する台地上からの眺めは大きく変わろうとしている。しかしながら台地上には、昔ながらの大小の畠やビニールハウスがならぶ田園風景がひろがり、市街地の喧騒が届くにはいたっていない。

なお遺跡名の峰ノ台は小字名に由来し、「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)」¹⁾では、台地平坦面上を包蔵地・貝塚として峰ノ台遺跡と呼称し、西側斜面部の貝塚を峰ノ台貝塚と呼称している。両遺跡ともに、「千葉県の貝塚」²⁾には記載されていない。

2 周辺の遺跡（第1図）

峰ノ台貝塚が立地する矢那川中流域は古代の遺跡が多く所在しているものの、縄文時代に形成された遺跡は極めて少ない。これは矢那川全体の流域を見渡したところでも同様である。木更津市でも、縄文時代の遺跡は上総丘陵上に縄文時代草創期・早期の包蔵地が比較的多く認められる程度であり、峰ノ台貝塚が形成された中期・後期の遺跡は極めて少ない。市域全体の中で現在確認されている貝塚も数える程度であり、峰ノ台貝塚は、東京湾東岸域の縄文時代を研究する上で重要な貝塚であるといえよう。

峰ノ台貝塚とは谷をはさんだ東側の台地上に、明石口遺跡³⁾がある。調査歴はないが、中期加曾利E式土器が散布している。矢那川上流域南岸には徳藏寺貝塚⁴⁾がある。これも調査歴はないが中期加曾利E式土器、後期堀ノ内式土器・加曾利B式土器が散布している。また、矢那川と小櫃川にはさまれた台地上には紙園貝塚⁵⁾がある。トレンチ調査が行われているが、中期中葉から後期末にかけての遺跡で、馬蹄形の貝塚であることが判明し、住居跡も確認されている。現在は消滅している。同じく矢那川と小櫃川にはさまれた台地西端部には永井作貝塚⁶⁾がある。貝層が確認され、後期堀ノ内式土器・加曾利B式土器が出土している。現在は消滅している。



第1図 遺跡位置図 1峰ノ台貝塚 2明石口遺跡 3徳藏寺貝塚 4舞園貝塚 5水井作貝塚

第1表 トレンチ杭座標値一覧

| 点名 | X座標 | Y座標 | 点名 | X座標 | Y座標 |
|-------|------------|-----------|--------|------------|-----------|
| 1 T-1 | -71547.326 | 11575.095 | 9 T-1 | -71512.601 | 11650.100 |
| 1 T-2 | -71551.361 | 11590.555 | 9 T-2 | -71507.478 | 11653.140 |
| 2 T-1 | -71555.814 | 11607.541 | 10 T-1 | -71497.125 | 11659.026 |
| 2 T-2 | -71560.621 | 11606.010 | 10 T-2 | -71507.063 | 11653.250 |
| 3 T-1 | -71448.228 | 11563.215 | 11 T-1 | -71540.543 | 11568.972 |
| 3 T-2 | -71489.053 | 11568.160 | 11 T-2 | -71543.453 | 11569.632 |
| 4 T-1 | -71553.493 | 11598.887 | 12 T-1 | -71559.740 | 11565.291 |
| 4 T-2 | -71559.288 | 11597.381 | 12 T-2 | -71557.304 | 11563.594 |
| 5 T-1 | -71563.166 | 11594.399 | 13 T-1 | -71635.505 | 11587.476 |
| 5 T-2 | -71568.034 | 11593.183 | 13 T-2 | -71634.083 | 11592.250 |
| 6 T-1 | -71559.499 | 11615.500 | 14 T-1 | -71587.416 | 11599.212 |
| 6 T-2 | -71562.816 | 11622.676 | 14 T-2 | -71583.420 | 11596.225 |
| 7 T-1 | -71519.320 | 11633.085 | 15 T-1 | -71549.494 | 11644.532 |
| 7 T-2 | -71528.667 | 11629.092 | 15 T-2 | -71547.535 | 11639.962 |
| 8 T-1 | -71499.580 | 11635.736 | 16 T-1 | -71571.139 | 11669.116 |
| 8 T-2 | -71508.360 | 11631.252 | 16 T-2 | -71569.226 | 11664.521 |

3 調査の経過（付図1）

今回の調査は、峰ノ台貝塚の範囲と貝層の状況を把握し、貝塚の保護・活用のための基礎資料を得ることを主眼としていたため、トレンチ調査と業者委託による地形測量を実施した。調査は10月1日から開始し、表面に散布する貝殻を目安にボーリング調査を行い、3地点の貝塚の分布範囲を確定した。その後、発掘調査が不可能であった1地点の貝塚を除き、貝塚の形成時期や堆積状況の把握ためのトレンチを設定し、調査を行った。貝塚自体の調査は、トレンチにかかった貝層表面の露出及び50cm×50cm四方の貝のコラムサンプル採集にとどめた。貝塚の調

査と並行し、縄文時代の居住域等を把握するため、貝塚隣接部・台地平坦面・谷底にトレンチを設定し、調査を行った。古くからの耕作による台地整形や近年の大型耕作機械による影響もあり、台地上の削平が進行しており、ほとんどのトレンチの表土直下はローム層であった。このため集落域を的確に把握することが困難であった。このような理由から台地上・台地周辺の表面採集を行い、居住域の推定のための追加資料を得ることとした。貝塚はいずれも台地縁辺部に形成され、耕作による影響は少なく、遺存状態が良好であることが確認された。

トレンチの設定はすべて任意であり、地形測量に際し、各トレンチそれぞれ2点のトレンチ杭の公共座標値を測定した（第1表）。トレンチの名称は、調査順に名称を付し、合計16本の設定となった。

調査期間中は天候に恵まれ、作業は極めて順調に進行し、すべての作業は10月31日に無事終了することができた。

注1 (財)千葉県文化財センター 1987『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)』

2 千葉県文化財保護協会 1983『千葉県の貝塚』

3 1に同じ

4 1に同じ

5 平野元三郎他 1967『紙闇貝塚』千葉県教育委員会

6 対馬郁夫 1957『木更津市永井作新田貝塚発掘略報』千葉県立木更津第一高等学校郷土研究部

II 調査内容

1 貝塚の状況

1 mのボーリング棒による貝層範囲の探査を行い、3地点の貝塚を確認することができた。いずれの貝塚も、ボーリングにより明瞭な貝層の感触を得ることができる範囲と、断続的に弱い感触しか得られない範囲とを認めることができた。おそらくこれらは純貝層や混土貝層と混貝土層の差異であろうと考えられる。しかし、峰ノ台貝塚が形成されている台地上は畑として耕作が続けられており、近年の大型耕作機械の導入によって貝層の拡散が進行している。よって、本来の混貝土層と、耕作による貝層の拡散によって近年形成された擬似的な混貝土層の差異が、肉眼では貝の破碎の進行状況や層のしまりの強弱によって区別できるものの、ボーリング調査では区別することができなかった。

これらの差異を明らかにする目的も含め、貝塚部分にトレンチを設定した。B貝塚では、この差異をトレンチ内では明瞭に捉えることができた。A貝塚では、ここ数年来の休耕で背丈ほどの篠竹の根が表土以下まで深く達し、土壤が攪拌されており、本来の混貝土層と擬似的な混貝土層の差異を捉えることはできなかった。

A貝塚 ボーリング調査の結果では、本貝塚中最も大規模な貝層である。また、これとは別に、9T北半に単独の小規模な貝層が形成されていると判断された。しかし、後述する9T・10Tの調査の結果、後期中葉に形成された大規模な貝層の南東側の縁辺部に、後期初頭の貝層（9T北半部）が形成されていた可能性が高いと判断した。後期初頭の貝層は、急激な地山の傾斜に沿うかたちで、後期中葉貝層下に深く入り込んでいるものと予想される。なお、ボーリング調査とトレンチ調査によっては、両者の貝層の分布範囲を区別して捉えることはできなかった。

貝塚北側は耕作（台地整形）により、比高差にして約3mにわたる削平を受けており、本来の貝塚の分布範囲を知ることはできない。なお、本来の混貝土層と擬似的な混貝土層の差異を捉えることができなかつたので、貝層縁辺部で認められた混貝土層は、測量図（付図1）中のA貝塚の範囲には含めていない。

B貝塚 ボーリング調査により捉えた貝層の範囲は、明瞭に貝層の感触を得られる範囲であるが、このラインは後述するトレンチ調査の結果（第2図）の、貝層と混貝土層Iとの境界線とおおむね一致している。混貝土層Iと暗褐色土の境界線をトレンチ周辺から追いかけたが、この境界線を明瞭に捉えることはできなかつた。よって測量図（付図1）中のB貝塚の範囲は縁辺の混貝土層（混貝土層I相当の土層）は含んでいないものである。なお、1T北側の宅地内ではボーリング調査を行えなかつたので、B貝塚の北側の分布範囲は不明である。また、西側の貝層の限界も、道路や畑による削平のため不明である。後述する11T・12Tでは貝層は検出されなかつた。貝層の範囲と表面の肉眼観察による貝片の分布範囲はおおむね一致していた。

C貝塚 C貝塚が形成された地点は、トレンチ調査を行えなかつた地点である。表面の肉眼観察では、広範囲にわたり破碎した貝の小片が散布していた。ボーリング調査の結果、純貝層・混土貝層の範囲を確認することができた。測量図（付図1）中のB貝塚の範囲は、この純貝層・混土貝層の範囲である。当初の表面の肉眼観察による範囲に比べ、かなり狭い範囲となつた。縁辺部で認められた混貝土層に関しては、本来の混貝土層であるか、もしくは擬似的な混貝土層であるかを区別できなかつた。

2 トレンチの状況

第1トレンチ（第2図 図版2）

B貝塚の形成時期や堆積状況を把握するために設定したトレンチである。1Tを設定した地点は現況では平坦面であるものの、西側は長さにして2m程度削平され、畠と道路がつくれられている。道路の西側は谷に通じる急斜面が形成されていることから、B貝塚は台地縁辺部に形成され、貝塚西端部が、畠や道路によって削平されたものと判断した。

表土を20cm程度除去すると、東側（平坦面側）から西側（斜面側）にむけて、ソフトローム・暗褐色土・混貝土層I・貝層・混貝土層IIが露呈した。これらの堆積状況を把握するためにサブトレンチ（1～3）を設定した。

サブトレンチ1の設定の結果、ソフトロームは明らかに地山のソフトローム層（7層）であり、暗褐色土は地山の漸移層（4～6層）であることが判明した。ただし、4層中ではイノシシの下顎骨片が検出されていることから、地山ではなく漸移層に人為的な営為が加わった土層である可能性が高いと考えられる。ともあれ、この状況から1T西側の地形は緩斜面部であることが判明した。なお、2層は表土下で認められた混貝土層Iであるが、この土層は貝の破碎は進行しているものの、主体となる暗褐色土は均質でしまりは良好であることから、二次的な移動を受けていない本来の混貝土層であると考えられる。

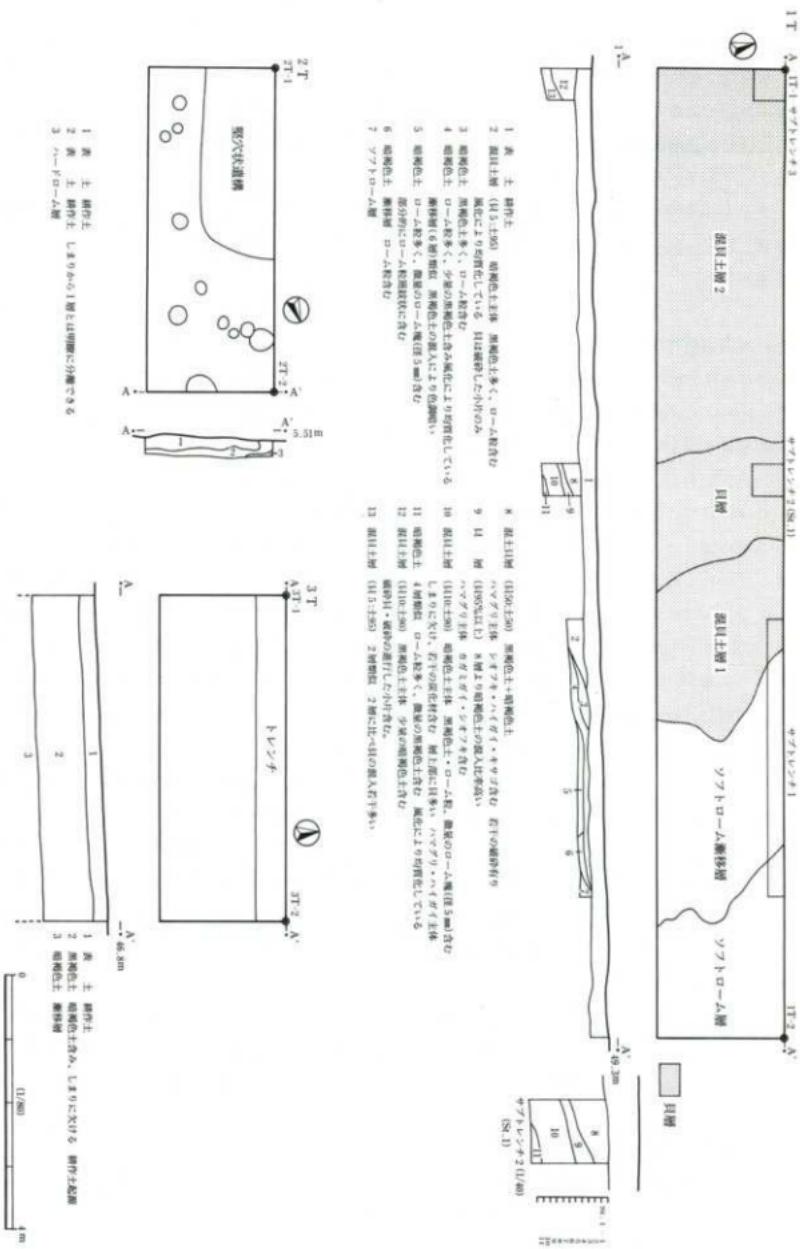
サブトレンチ2は、B貝塚のコラムサンプル(St. 1)の採取を兼ねて50cm×50cmの規模で、表土下から5cm毎に掘り下げていったもので、斜面の傾斜方向と同一方向に傾斜して、貝層が堆積していた。コラムサンプルは上層から番号を付し、最上層がSt. 1-1で、最下層がSt. 1-11となる。貝層の堆積が認められなくなるレベルで調査を終了したが、その時点での最下層（11層）は、サブトレンチ1の4層に類似し、同一の土層と判断した。貝層（8～10層）の層厚は約60cmである。10層の混貝土層は2層の混貝土層に類似しているが、同一の土層であるか否かは判断できなかった。8層・9層はとともに大形の二枚貝を主体とする貝層で、局所的にイボキサゴやマテガイが集中する。なお、このコラムサンプル(St. 1)は調査終了と同時に貝類や動物遺存体の分析・鑑定を行っている（第2表）。

サブトレンチ3はサブトレンチ1(St. 1)の貝層（8～10層）の堆積の状況の把握を目的として設定した。12層・13層は表土下で認められた混貝土層IIである。12層は貝の破碎が進行し小片化しており、主体となる黒褐色土はしまりに欠け不均質であることから、再堆積したものと判断した。ただし、再堆積の時期は、黒褐色土が近年の耕作によるものであるような攪乱風の土質ではないことから、周辺の土壤が貝塚の貝をまきこみながら斜面方向に堆積していくものと理解したい。13層は2層に類似するものである。13層下で8層に相当する混貝土層を検出した。これによって貝層が斜面部に沿うように斜方向に堆積していることが明確になった。サブトレンチ3の調査はこのレベルで終了した。

西側の畠・道路による削平断面（道路側法面）では、8層に相当する貝層が露呈しており、13層下から連続して貝層が形成されていることが判明した。層厚は約55cm～135cmであり、きわめて遺存状態が良好である。削平断面での貝層の検出レベルは48.2m～47.3mであり、南側から北側に向かって傾斜している傾向を捉えることができた。

第2トレンチ（第2図 図版3）

B貝塚に伴う集落域の確認のために設定したトレンチである。表土を約30cm程度掘り下げた時点で、地山のハードローム層が検出された。漸移層・ソフトローム層は確認できなかった。耕作により全て削平されたものと考えられる。



第2図 1トレーンチ・2トレーンチ・3トレーンチ実測図

11基のピットと隅丸方形状の竪穴状遺構を検出した。ピットの覆土は暗褐色土主体にローム粒を多く含み粘性に富むもので、ローム塊の混入の度合いやしまりに若干の差異が認められる程度である。すべて縄文時代に属するものと思われる。ボーリングによりピットの深さを測定したところ、約10cm～50cmであった。これらのピットが住居に伴っていたものであるか、単独のピットであるかは不明である。

竪穴状遺構の覆土は、暗褐色土を主体にローム粒・ロームブロックを多く含むもので、しまりに欠ける。歴史時代の設営であるとおもわれるが、古代よりも新しい時期の設営である印象を受けた。性格は不明である。なお、2T内のピット等の遺構は発掘していない。

第3トレンチ（第2図 図版3）

C貝塚に最も近接した地点の緩斜面上で設定したトレンチであるが、トレンチ設定地点はC貝塚形成地点より低標高（比高差約1m）の谷寄りの地点である。よってトレンチ内で遺構が検出された場合でも、これらの遺構が貝塚に伴うものである可能性は低いものと予想した。あくまで西側緩斜面での様相の把握を目的として設定したトレンチである。

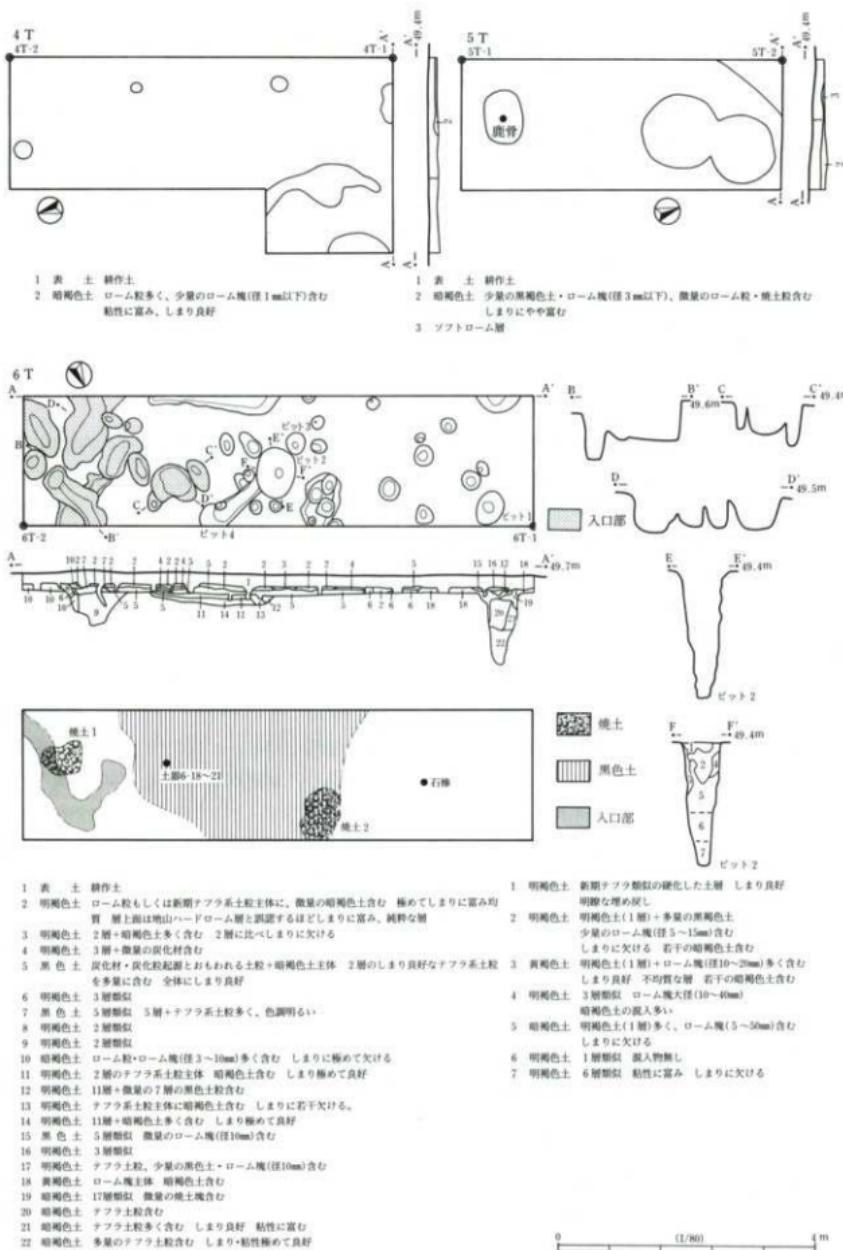
表土を約25cm程度掘り下げた時点で、耕作による多数の攪乱が認められた。調査区の大半が攪乱であるような状況であった。この段階での遺構の検出は困難であったので、トレンチ内北半を幅50cm、深さ約75cm程度掘り下げた時点でソフトローム漸移層の面を検出した。漸移層にいたるまでの土層は、耕作土起源のしまりに欠ける土層で、黒褐色土を主体に暗褐色土、少量のローム粒を含むものであった。漸移層面で遺構は検出されなかった。

第4トレンチ（第3図）

B貝塚に伴う集落域の確認のために2Tを設定したが、2Tでは耕作により地山が削平され、B貝塚周辺の様相を把握できなかった。よってB貝塚と2T間に4Tを設定した。2Tで確認されたピット群の性格や平面的なひろがりを明らかにする目的も含めての設定である。

当初は2m×5m規模の発掘区を設定し、表土を約20cm程度掘り下げたところソフトローム層が検出され、2基のピットが検出された。トレンチ南西端にもピット状のシミが認められたので、南西方向に1m幅でL字形に発掘区を拡張し、不整形のシミと3基のピットを検出した。ピットの覆土は、暗褐色土主体にローム粒・ローム塊・黒褐色土を多く含むもので、焼土粒の混入の有無やしまりの差異が認められる程度である。すべて縄文時代に属するものと思われる。ボーリングによりピットの深さを推し測ったところ、約20cm～50cmであった。これらのピットが住居に伴っていたものであるか、単独のピットであるかは不明である。不整形のシミの覆土はピットの覆土と大差なく、縄文時代に属するものと思われる。深さは中央の円形プラン部で約50cm、両脇の溝状の部分で約20cmである。この平面形態から判断すると、不整形のシミは住居内の周溝と、入口部のピットもしくは埋甕埋設部のピットであろうと考えられる。時期的には中期後半である可能性が高いと考えられる。この推測が正しいとするならば、2T・4Tで検出されたピット群は、住居跡に伴っていた柱穴であると考えられ、耕作等により住居跡が削平されてしまったものと考えられる。なお、B貝塚の形成時期は後期前半であり、2T・4Tの住居跡は貝塚とは直接関係のないものであると判明した。

1T・2T・4Tはおおむね同一ライン上で設定した発掘区である。各トレンチの表土下の様相は、1T東側では漸移層、4Tではソフトローム層、2Tではハードローム層であり、本来の緩斜面が耕作等により削平され平坦化した地形であることが考えられる。後述する同一ライン上の6Tも、表土下はハードローム層である。なお、4T内のピット等の遺構は発掘していない。



第3図 4トレンチ・5トレンチ・6トレンチ実測図

第5トレンチ（第3図 図版3）

2T及び4Tで予測された住居跡のひろがりの把握を目的として設定したトレンチである。表土を約20cm掘り下げたところ、発掘区の北西端（ソフトローム層）を除くすべての部分で暗褐色土が検出された。この暗褐色土は土層断面の2層と同一のものであり、縄文時代の住居跡の覆土であると考えられる。ボーリングによる深さは約15cm～30cmであった。1軒の住居跡であるか複数軒の重複であるかは不明である。ともあれ遺構が密に重複しているものと予想されたため精査を重ねたところ、北半に梢円形の土坑状のプランと、南半に重複する2基の円形土坑状のプランを確認した。いずれも住居跡をきる縄文時代の土坑であろうと思われる。ボーリング棒による南半の土坑の深さは約30cm、北半の土坑の深さは約15cm～30cmである。南半の土坑の覆土は、暗褐色土を主体にローム塊（径5mm）・焼土粒・焼土塊、少量の黒褐色土・黒曜石碎片を含むもので、しまりに欠け、少量の破碎貝片（ハマグリ主体）を含む。北半の土坑の覆土は、暗褐色土を主体に黒褐色土・焼土粒が多く、微量のローム塊（径3mm以下）・焼土塊を含むものである。南半の土坑の精査段階で鹿角と鹿の下顎骨が出土した（図版3）。鹿角や下顎骨は完形ではないので、覆土内に同一個体が残っている可能性もある。なお、5T内の遺構は発掘していない。

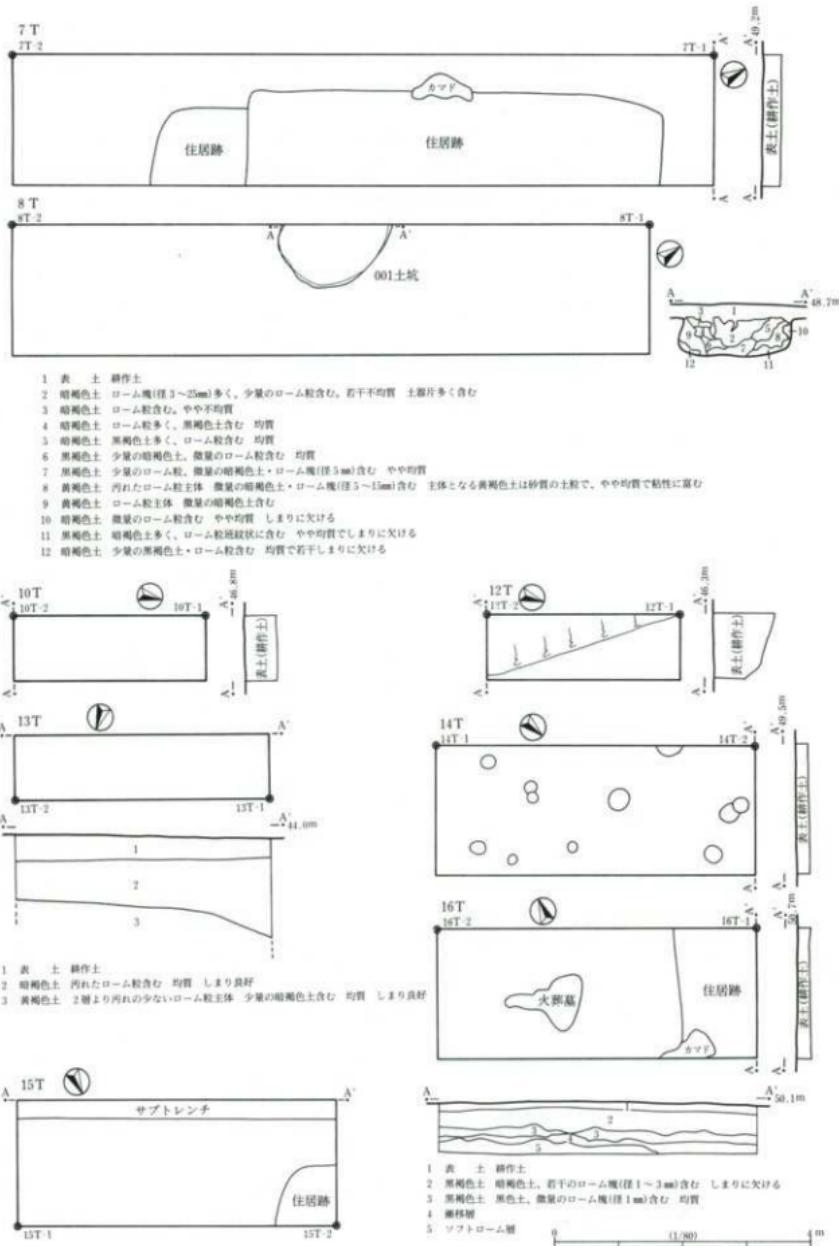
第6トレンチ（第3図 図版3）

台地上の居住域の様相を把握するために、台地縁辺部から1T・4T・2Tと同一ライン上で発掘区を設定してきたが、このライン上での台地中央部の平坦面の状況を把握するために6Tを設定した。

表土を20cm程度掘り下げたところ、堅緻な明褐色土の面を検出した。この明褐色土（2層）は一瞥するとしまりの良好なソフトローム層もしくはやや軟弱なハードローム層のようであるが、詳細に観察すると、微量の暗褐色土を含み色調がやや暗いものである。堅緻な明褐色土を検出した面で、焼土1と石棒を検出した。焼土1は明瞭な掘り込みを伴うものではなく、焼土除去後の面には熱を受けて硬化・赤化した範囲等は認められなかった。炉としての機能を類推することも可能であろうが、現状では断定できない。石棒（図版3）は緑泥片岩製で、表土直下での出土であったため、耕作や風化の影響により脆弱化が進行し、取り上げる際に崩れてしまった。図示不可能となってしまったが、出土時点での全長は23cmで、端部の形態は両端ともに不明、断面形態は上半部がカットされており判然としないが、おおむね円形であろうと考えられる。焼土1に伴う柱穴等を確認するため精査を重ねたが、この面で確認できた遺構はピット1のみであった。ピット1は後述する他のピットの覆土が明褐色土を主体とするものに対し、暗褐色土を主体とするものであった。

層厚約5cm～7cmの堅緻な明褐色土を除去すると、トレンチの中央部に黒色土（5層）が認められた。炭化材起源の土層と思われ、住居跡等の遺構の覆土であると判断した。黒色土分布域内には明褐色土を覆土とする円形のプランが確認され、断面形帯が先細で、深さ約2mにもおよぶ柱穴もしくは土坑（ピット2）であることが判明した。黒色土分布域外の地山はハードローム層であり、この時点で精査を重ねて、図示した多くのピットを検出した。いずれのピットの覆土もピット2同様、明褐色土を主体とするものであった。

層厚5cm程度の黒色土を除去したところ、複数のピットと焼土2を検出した。焼土2は浅い掘り込みを伴うが、底面熱を受けて硬化・赤化した範囲等は認められなかった。焼土1同様、炉としての機能を類推することも可能であろうが、現状では断定できない。焼土2の掘り込みと重複するピットは、焼土除去後に検出されたもので、覆土は他のピット同様の明褐色土を主体とするものである。なお、黒色土の除去後に壁の検出に努めたが、確認することはできなかった。



第4図 7トレンチ・8トレンチ・11トレンチ・12トレンチ・13トレンチ・
 14トレンチ・15トレンチ・16トレンチ実測図

6 Tで検出されたピットは、ピット1を除きすべて明褐色土の覆土を有するものである。この覆土は前述のとおり、一瞥するとしまりの良好なソフトローム層もしくはやや軟弱なハードローム層のようであり、ピットの地山ハードローム層に形成されているピットの壁面・底面を検出する際には、土の色調に頼るのではなく、しまりに頼りながら検出するような状況であった。いずれのピットもプラン確認時点での規模と完掘後の規模では、完掘後の規模の方がひとまわり大きくなっている。

6 T東端部で、重複するピット群が検出された。プラン確認の時点では不整形の溝状のものであったが、前述のように覆土と壁面・底面のしまりの差異に頼りながら調査した結果、このような重複するピット群となった。覆土の印象から同時期に埋没したピットであると考えられる。トレンチ内の様相のみであり断定はできないが、大形の住居跡に伴う入口部であろうと考えられる。現地での印象として、この入口部を伴う住居跡は黒色土の堆積しているトレンチ内部ではなく、トレンチ外の東側に設営されている印象が強かった。

6 Tは黒色土を伴う住居跡と、入口部を伴う住居跡の2軒の住居跡が設営されている可能性が高い。焼土1・2の性格については不明であるが、ともに炉であると仮定するならば、入口部を伴う住居跡の主体部はトレンチ外であるから、この住居跡以外に2軒の住居跡を想定し、最低3軒の住居跡の存在を想定しなければならない。

第7トレンチ（第4図 図版3）

台地平坦面中央部での集落の展開の把握のために設定したトレンチである。表土を約20cm掘り下げると、暗褐色土系の地山層を検出した。暗褐色土中には、黒褐色土系の覆土を主体とするプランが2基確認された。方形のプランで、焼土を少量含む凝灰岩質砂質土（山砂）が認められることから、カマドを有する古代の住居跡であろうと思われる。縄文時代の遺構を検出するためソフトローム漸移層面まで掘り下げたが、縄文時代の遺構は確認されなかった。

第8トレンチ（第4図 図版3・4）

台地平坦面縁辺部での集落の展開の把握と、A貝塚縁辺部の様相の把握のために設定したトレンチである。表土を約20cm掘り下げると、地山のハードローム層が検出された。トレンチの中央部に土坑が検出された。推定されるプランの1/2程度の検出であったが、001号土坑として調査を行うこととした。覆土中から鳥骨（カモ科）が出土した。土層断面に接する部位での出土であり、8層と10層が接する地点に集中している。このほかに8層下面や6層下面からも散発的に鳥骨が出土している。トレンチ外の未調査部分にも多くの鳥骨が存在すると考えられる。001号土坑はフラスコ状の断面形態であるが、8層はフラスコ状土坑の壁面の崩壊土層であると考えられる。崩壊土層が認められるということは、墓坑のように一挙に埋め戻されたものではなく、開口期間の存在を示している。鳥骨が解剖学的に原位置を保っていたか、一定の解体後のものであるかは判別できないが、出土状態は土層の傾斜に沿うような斜方向の状態ではなく、立ち上がっているような状態であった。

第9トレンチ（第5図 図版4）

A貝塚の分布範囲・堆積状況・形成時期の把握のために設定したトレンチである。本来ならば台地縁辺部まで1本のトレンチで調査を行うべきであるが、家畜の囲い込み用のフェンスが設置されており、トレンチを分断せざるを得なかった。平坦面側のトレンチを9Tとし、斜面側のトレンチを後述する10Tと呼称することとした。

表土を約20cm掘り下げると、トレンチ中央北側のみで貝層を検出することができた。しかし、当初のボ

ーリング調査では、トレンチ北半の広範囲において貝層を確認しているので、サブトレンチ1を設定し、貝層の堆積状況の把握に努めた。サブトレンチ内で暗褐色土(13層)を除去すると、おおむね斜面方向(北方向)に傾斜する貝層の堆積をトレンチ北端部まで確認することができた。この混貝土層の分布範囲はボーリング調査による範囲とおおむね一致し、この貝層は10T区域内に繋がっていくようである。貝層の堆積状況と形成時期の把握のためにサブトレンチ2を設定し、さらに地山の土層の様相を把握するためにサブトレンチ3を設定した。

サブトレンチ2では、コラムサンプルの採取を兼ねて50cm×50cmの規模で、表土下から5cm毎に掘り下げていったもので、層厚約40cmの貝層が検出された。おおむね斜面方向に傾斜するかたちでの堆積であり、上半は二枚貝を主体とする混土貝層、下半は破碎した二枚貝が10%程度含まれる混貝土層であった。貝層下は暗褐色土を主体とする自然堆積層で、貝層下から約80cmでソフトローム層を検出した。なお、このコラムサンプルの分析・鑑定は行っていない。

サブトレンチ3は暗褐色土を約40cm掘り下げるとソフトローム層を検出した。サブトレンチ2のソフトローム層との比高差は約80cmで、地山が北方向に傾斜していることが判明した。サブトレンチ2内の4・5・6層はサブトレンチの10・11・12層と同一の自然堆積層である。したがってこの地点で遺構が設営されている可能性は低いと考えられる。

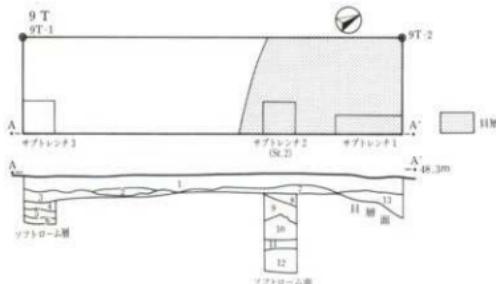
第10トレンチ(第5図 図版4)

A貝塚の分布範囲・堆積状況・形成時期の把握のために設定したトレンチである。9Tとはフェンスを挟んだ延長線上の斜面側に設定したもので、フェンスによって分断された9Tとの間隔は約40cmである。

10Tはボーリング調査の時点で、発掘区全体に貝層が分布していることが判明していた。しかし、表土除去の時点ではトレンチ中央部のみに貝層が検出された。貝層分布範囲南端部では断面観察で貝層(3層)が確認されており、貝層範囲の南限はおさえることができた。しかし、ボーリング調査の時点ではトレンチ全体に貝層が分布していることが判明していたので、表土直下で確認された貝層とは形成時期を異にする貝層の存在が示唆された。この時点でこの形成時期を異にする貝層が、9T北半で確認された貝層から繋がるものであるということが充分予測されたので、サブトレンチ1を設定し、貝層上面の検出を開始した。しかし、サブトレンチ1内の土層からは多量の獸骨片が出土し、これらの取り上げに多くの時間を費やすこととなった。よって、サブトレンチ1は40cm程度掘り下げた時点で調査を中止し、ボーリングによる貝層上面レベルの探査を行った。土層断面中にドットで示したものが貝層上面の推定レベルである。9層で確認された北方向への傾斜が明瞭に連続していることを捉えることができた。

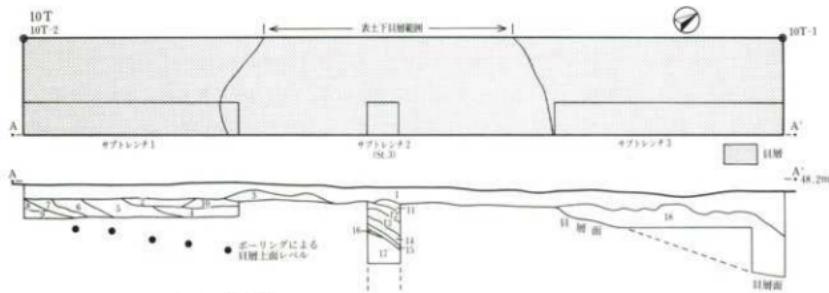
表土直下で検出された貝層の堆積状況と形成時期の把握のためにサブトレンチ2を設定した。コラムサンプルの採取を兼ねて50cm×50cmの規模で、表土下から5cm毎に掘り下げていった。トレンチ内は間層(14・16層)をはさんで純貝層(12・15層)・混土貝層(11・17層)・混貝土層(13層)が互層となって検出された。堆積方向は北東方向に傾斜しており、遺存状態は極めて良好であった。貝層中の貝類の構成は層毎に異なり、形成時期・形成季節の差異想定された。貝層の堆積の下限を確定させるために掘り下げていったが、深さ1mに達した時点で、コラムサンプルの採取を行いながらの調査が限界に達した。ボーリング棒により下限の探査を試みたが、遺存状態良好な貝層に阻まれ、ボーリング棒をさすことができなかつた。推定層厚不明の良好な貝塚であり、さら下層での9Tから連続する貝層の存在を予想すると、大規模な貝塚であることがうかがえる。なお、このコラムサンプルの分析・鑑定は行っていない。

貝層の北半の堆積状況を把握するためにサブトレンチ3を設定した。サブトレンチ3を掘り下げると、



- 1 表 土 純作土
 2 喀褐色土 少量のローム粒・ローム塊(径1~2mm)含む 稍干不均質
 3 喀褐色土 黒褐色土多く、微量のローム粒含む
 4 喀褐色土 黒褐色土多く含む 稍めて均質
 5 喀褐色土 黒褐色土・ローム粒多く含む 稍めて均質
 6 喀褐色土 細粒層
 7 喀褐色土層 (自10.2m) 喀褐色土主体 黒褐色土・ローム粒。少量のローム粒含む
 8 泥土貝層 二枚貝(ハマグリ80%以上)ハイガイ10%以下・カギガイ10%以下)主体 喀褐色土含む
 9 泥貝土層 喀褐色土主体 黑褐色土多く、少量のローム塊(径1~2mm)・貝土粒・炭化貝含む
 貝は破砕した二枚貝10%程度混入 梶めてしまり良好

- 10 喀褐色土 = 4層
 11 喀褐色土 = 5層
 12 喀褐色土 = 6層
 13 喀褐色土 少量の黒褐色土・ローム粒含む やや均質



- 1 表 土 純作土
 2 喀褐色土 黒褐色土、微量のローム粒含む しまり良好
 3 泥貝土層 (自1.5m) 喀褐色土主体 多量の黒褐色土含む 破砕した二枚貝主体 しまり良好
 4 喀褐色土 ローム粒、微量のローム塊(径3~5mm)含む
 5 喀褐色土 ローム粒。少量のローム塊(径1~3mm)・貝土粒含む
 6 喀褐色土 黒褐色土多く含む しまりに欠ける
 7 喀褐色土 テフラが多く含む 若干干しまりに欠ける
 8 喀褐色土 新開田・フク類似土
 9 喀褐色土 テフラ土・黒褐色土含む
 10 喀褐色土 少量の黒褐色土。微量のローム塊(径1mm)含む
 11 泥土貝層 (自50.50) 道存状態良好なハマグリ・シオワキ・イボキサコ主体 黒褐色土主体 喀褐色土少含む
 12 日 層 ハマグリ・シオワキ主体 オキアサリ・ハイガイ含む 道存状態良好
 13 泥貝土層 (自30.70) 黒褐色土主体 喀褐色土多く含む オキアサリ・ハイガイ・シオワキ主体
 14 黒褐色土 喀褐色土多く含む 均質 自然基盤土層
 15 日 層 イボキサコ純貝層 道存状態良好
 16 刃との剥離面に沿うように薄い経層有利(ハマグリ・ツメタガイト～2枚程度の層)
 17 黒褐色土 14層類似
 18 泥土貝層 (自30.70) 道存状態良好なハマグリ・シオワキ・イボキサコ主体 イボキサコ破砕目立つ
 黑褐色土主体 喀褐色土含む
 19 黒褐色土 喀褐色土含む しまりに乏しい 微量の礎層貝含む しまりの程度で上下に分解可

0 (1/200) 4m

第5図 9トレンチ・10トレンチ実測図

南端では貝層の上面が確認されたが、北端は1m程度掘り下げた時点で貝層上面がやっと確認された。北方向へ傾斜しながらの堆積であることが判明した。

第11トレンチ（第4図）

畑作のために斜面を削平し、平坦面を作出している地点に設定したトレンチで、1Tを設定した平坦面との標高差は約2mである。B貝塚の広がりと、地形の把握のために設定したトレンチであるが、表土を約40cm掘り下げたところ、平坦なハードローム層が検出されたのみであった。

第12トレンチ（第4図）

現況での斜面肩部に設定したトレンチで、C貝塚の広がりと、地形の把握のために設定したトレンチである。表土を約40cm掘り下げたところ、ハードローム層が検出され、緩斜面から急斜面への肩部が検出された。

第13トレンチ（第4図）

西側斜面部を開析する谷部には多量の土器片の散布が認められているが、ここでの遺構の有無や、多量の土器片の散布の要因を探るために、谷頭部にトレンチを設定した。

表土を約20cm掘り下げると、汚れたローム粒を含む暗褐色土（2層）が検出された。この暗褐色土は均質でしまりが良好である。ソフトローム層のように均質であり、自然堆積によって形成されたと考えられる。縄文時代後期中葉以降の土器片を多く含んでいることから、縄文時代後期中葉以降に堆積したものと考えられる。暗褐色土の面は西側へ傾斜しており、地山の傾斜を示しているものと考えられる。暗褐色土の面の精査を行い、遺構の検出に努めたが、遺構は検出されなかった。暗褐色土を掘り進めると、汚れの少ないローム粒を主体とする黄褐色土（3層）が検出された。2層同様しまりは良好で、ソフトローム層のように均質であり、自然堆積によって形成されたと考えられる。縄文時代中期後半の土器片を多く含んでいることから、縄文時代中期に堆積したものと考えられる。黄褐色土の面で精査を行い、遺構の検出に努めたが、遺構は検出されなかった。黄褐色土を約50cm程度掘り進めたが土層に変化はなく、土器片が出土しなくなってきた。トレンチの深さが150cm程度まで達し、崩壊の危険性が出てきたため、調査を終了した。

第14トレンチ（第4図 図版4）

5Tで検出された中期後半の密な遺構配置の展開を把握するために、台地平坦面の端部に設定したトレンチである。

表土を約20cm掘り下げると、ソフトローム層を検出した。耕作による擾乱が認められたが、11基のピットを検出した。ピットの覆土は暗褐色土を主体にローム粒を含み、おおむね均質なもので、焼土・黒褐色土の有無や、ローム粒の混入の度合いに差異が認められる程度である。覆土から判断してすべて縄文時代に属するものと考えられる。遺構外の単独のピットであるか、竪穴住居跡の柱穴の痕跡であるかは不明である。炉跡等は認められなかった。ボーリングによりピットの深さを測定したところ、約10cm～35cmであった。ピットは発掘していない。

第15トレンチ（第4図 図版4）

台地平坦面の中央部での様相の把握のために設定したトレンチである。表土を約20cm掘り下げると黒褐色土を検出した。この時点で遺構の有無を確認するための精査に努めたが、遺構は検出できなかった。確實に縄文時代の遺構を検出するために、ソフトローム漸移層まで掘り進めることとした。漸移層より上面で、歴史時代に属すると思われる竪穴住居跡が検出されたが、縄文時代に属する遺構は検出されなかった。

本トレンチはソフトローム層まで約80cmもの堆積が認められ、台地平坦面の中央部では耕作による地山の削平が進行していないことが判明した。

第16トレンチ（第4図）

台地平坦面の縁辺部での様相の把握のために設定したトレンチである。表土を約20cm掘り下げるとソフトローム層を検出した。トレンチ東側ではカマドを有する住居跡が検出され、黒褐色度主体の覆土から古代に属すると思われる。トレンチ中央部西側には、T字状のプランを有する火葬墓が検出された。焼土粒・炭化材・火葬骨の碎片が認められ、中世に属するものと考えられる。縄文時代に属する遺構は検出されなかった。

3 出土遺物

（1）土器（第6図～第8図 図版5）

トレンチ出土土器の大半は表土（耕作土）から出土したもので、表土下で検出された遺構の設営時期や貝層の形成時期を直接示すものとは考え難いものが大半である。よってここでは、遺構の設営時期を示す可能性が高い土器や、貝層内から出土した土器群を中心に図示することとした。遺物番号はトレンチ毎に更新せずに通し番号とし、各々の出土位置をその都度付しておいた。写真図版掲載の土器は、拓影図・実測図では表現し得ない要素を有する土器や、代表的な土器を取捨選択して掲載している。

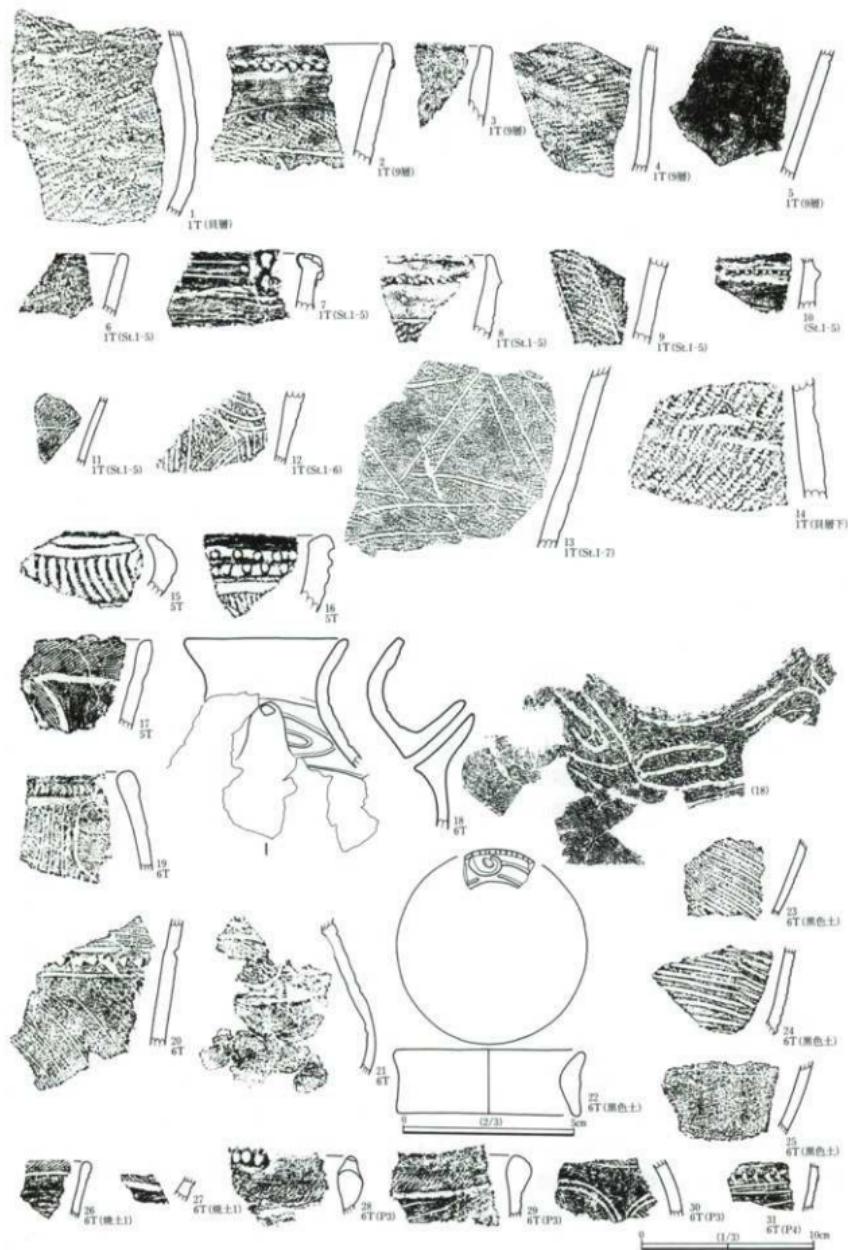
1～14は1T出土の土器である。14以外はおおむね堀之内2式期に属するものと考えられる。1・4は胎土・焼成等から判断して堀之内2式期（古段階）に属すると考えられる。3は器表面に縄文が施され、内面に浅い凹線が2本巡るようである。7は口唇面に8字状貼付文が貼付され、堀之内2式期に下るものと考えられる。破片下端に横位の沈線が施される。12の施文具は半截竹管であり、堀之内2式期に下るものと考えられる。14は器厚・縄文の雰囲気から判断して堀之内1式期に属するものと考えられる。

15～17は5T出土の土器である。15・16は加曾利EII式期に属し、17は称名寺1式土器である。いずれも表土下の精査の段階で出土した破片で、重複する遺構の設営時期を示す可能性が高いと判断した。5T出土土器は中期後半加曾利EII式期の破片が量的に卓越することから（第3表）、これらの重複する遺構の設営時期もおおむね中期後半を中心とする時期と考えられよう。

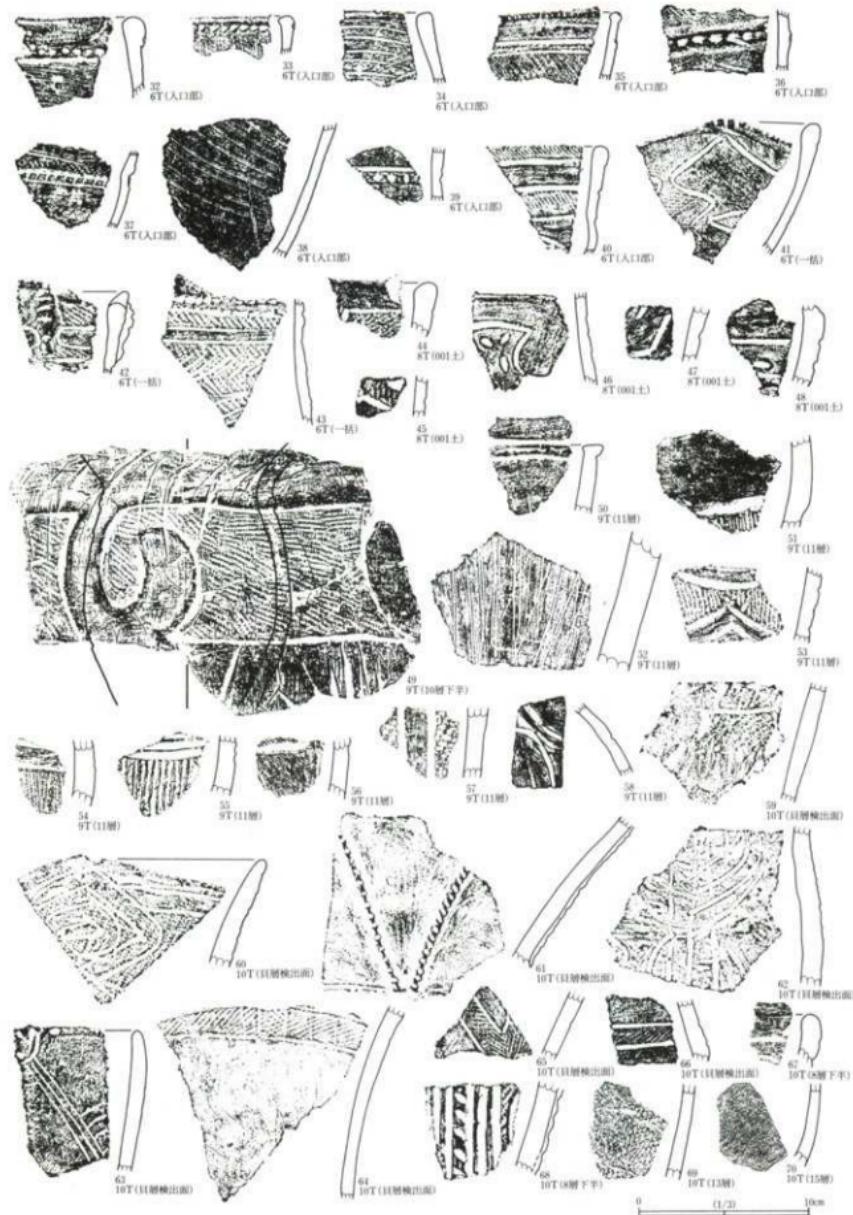
18～43は6T出土の土器である。安行1式期に属する破片が大半である。18～21は黒色土中からまとまって出土したもの（第3図）、18と21は同一個体である。脆弱な焼成の注口土器で、頸部下端と注口基部付近に横位の区画沈線が巡り、無節の縄文地に横位方向の区画文系の意匠が施される。関東地方での類例に乏しく即断はできないが、東海地方の系譜上で生成した土器である可能性が高い。後期後半に属するものと考えられるが、晩期初頭に下る可能性もある。19・20は安行1式土器である。22は滑車形の耳飾りで、内面に平行沈線と渦巻文が施される。表面には漆が塗布されていたような痕跡が認められる。後期後半から晩期初頭にかけての所産であろう。25は粗いケズリ調整がなされる。26は小形の個体で、安行1式土器である。27は小破片であり詳細は不明であるが、沈線内と縄文施文部に赤彩塗布の痕跡が残る。沈線の雰囲気や器表面の焼成から加曾利B1式土器の可能性が高いと判断した。36は低い突带上に押し引き風の刺突が施される。41は加曾利B2式土器である。

44～48は8T内001号土坑出土土器である。44・45は称名寺1式土器、45～48は称名寺2式土器である。

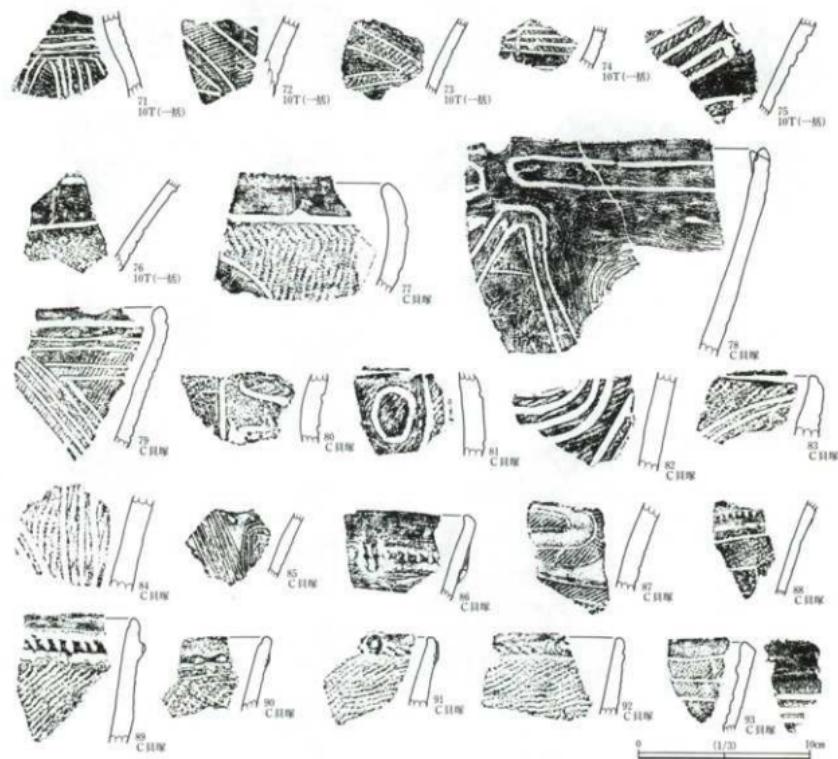
49～58は9T出土の土器である。49は貝層の下半から出土したもので、胴下半の区画は沈線のみで描出されるが、渦巻文や頸部下端の区画は微隆起と沈線の組み合わせによって描出される。称名寺1式期に伴



第6図 出土土器 (1)



第7図 出土土器（2）



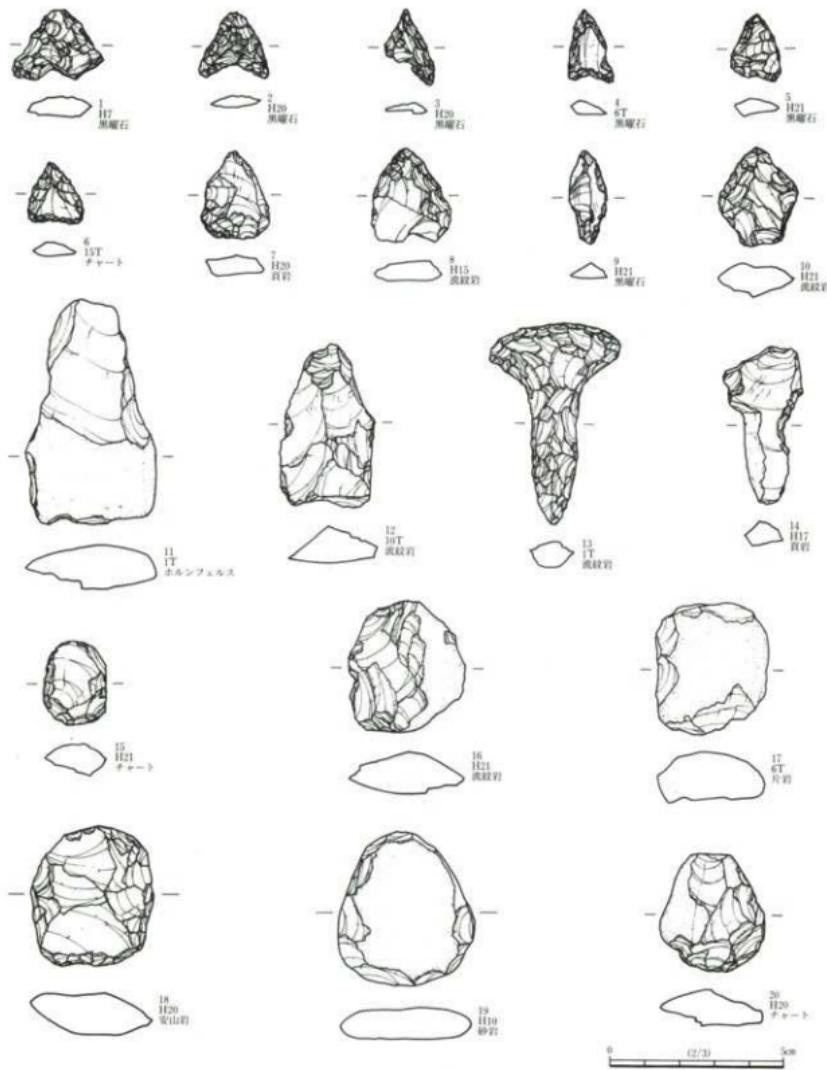
第8図 出土土器（3）

う土器で、東北南部から北関東の系譜上で生成した土器であろう。50は加曾利E II式もしくはE III式期の鉢形土器の破片であろう。51は加曾利E III式期の口縁部付近の破片であろう。52～57は加曾利E II式土器である。58は隆帯と沈線により意匠が描出されている。有孔鈎付土器の破片の可能性が高いと考えられるが、詳細は不明である。

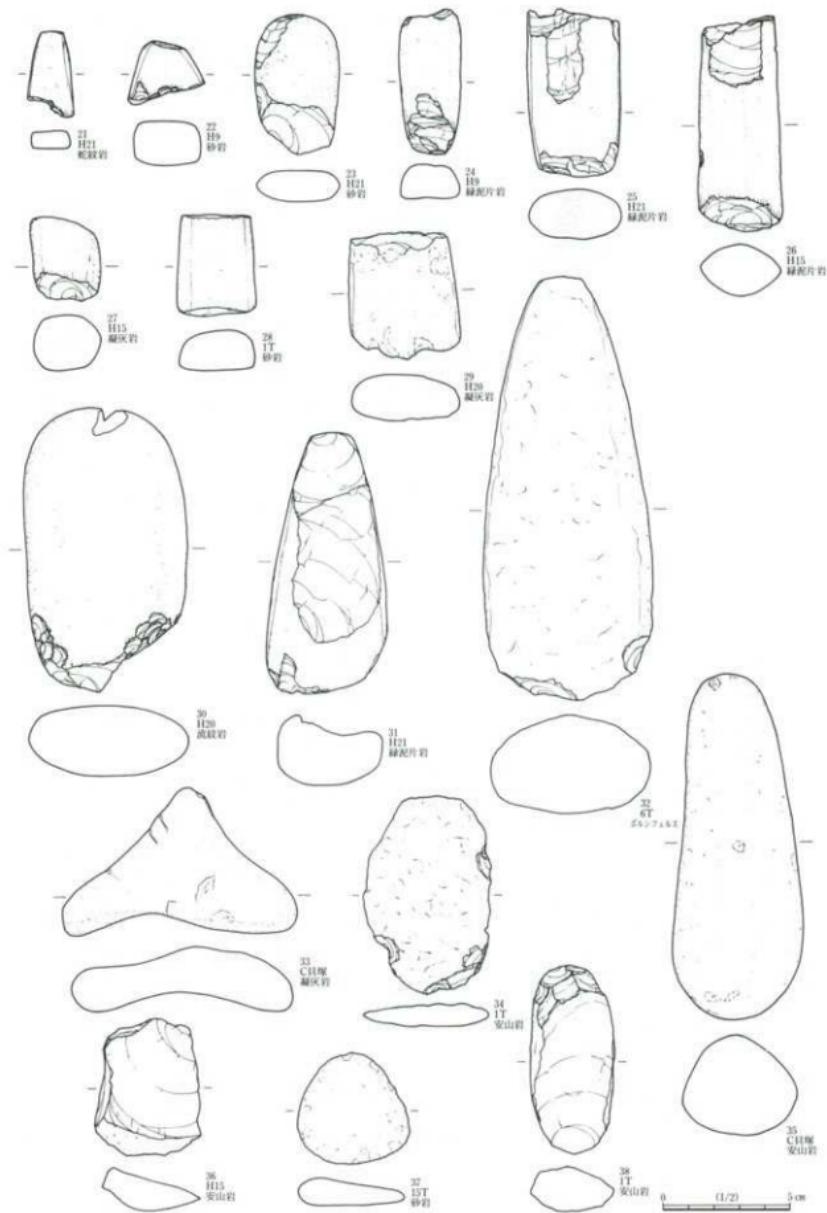
59～76は10T出土土器である。59は堀之内1式土器の胴部下半の破片である。60～62は堀之内1式期（新段階）から堀之内2式期にかけての破片である。60の施工具は半截竹管である。63～66は堀之内2式土器である。63は風化による器表面の脆弱化が進行し詳細は不明であるが、破片右上の単位部は貼付文が剥落したようである。3本単位の沈線により意匠が描出されている。64は横位の帶縄文部に継位の沈線が認められることから、加曾利B 1式土器の可能性もある。66は胴部下半で屈曲する鉢形土器の破片である。67は称名寺1式土器である。69は堀之内2式期もしくは加曾利B 1式期に属する。70は楕形土器の胴部破片で、焼成・色調から判断して加曾利B式期に属するものと判断した。71は堀之内1式土器（新段階）、72・73は堀之内2式土器、74は加曾利B 1式土器、75・76は加曾利B 2式土器である。

77～93はC貝塚出土土器である。土地所有者が耕作の際、貝層から出土した土器をまとめておいたもの

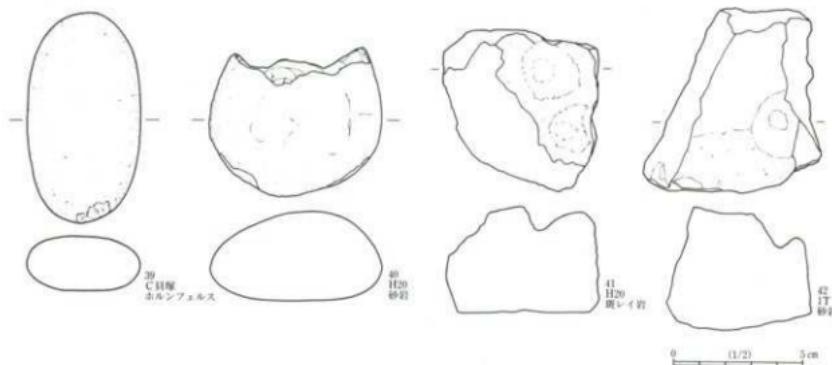
を頂戴した資料である。後述するC貝塚出土石器も同様の経緯で入手したものである。77は沈線の雲間氣と口縁部断面形態から加曾利E III式土器（新段階）と考えられる。78は胸部の山形の意匠の脇に半截竹管による円形風の意匠が描出されている。堀之内1式土器であろう。79～84は堀之内1式土器である。86～92はおおむね堀之内2式土器であろうと考えられるが、91・92は加曾利B 1式期に下る可能性もある。93は加曾利B 1式土器である。



第9図 出土石器(1)



第10图 出土石器 (2)



第11図 出土石器（3）

（2）石器（第9図～第11図 図版5）

トレンチ出土及び表面探集によって得ることのできた石器のうち主要なものを図示したが、大半は表面探集の石器である。表面探集の石器については第13図中の地点番号の前にHを付している。C貝塚とは土器同様、畑作の際に出土したものである。石器石材については個別に記している。

1～10は石鎌であるが、5～8は未製品であろう。9・10は錐様の石器である可能性もある。11・12は石鎌の可能性もあるが、断定はできない。13・14は石錐である。15～20は楔形石器であるが、17は石棒の再生品で、端部に加工痕らしきものが認められるが、磨痕が認められることから、楔形石器の範疇からは逸脱する可能性が高い。21～32は磨痕が主体的に観察される石器である。21・22・29・31・32は磨製石斧である。24～28は断面形態から判断して、石剣・石刀の破片もしくは再生品であろうと考えられる。30は刃部が作出される砾器である。33は用途不明の石器で、三叉状もしくは三角形の形態の一辺に切れ目が3か所認められる。34～42は打痕が主体的に観察される石器である。34は楕円形の扁平な砾の端部に打痕が認められる。37も端部に打痕が認められる。36・37は大形の剥片である。39・40は端部に打痕が認められ、39は敲石と捉えられる。41・42は凹石である。

図示した石器のうち、時期を推定できるものは、6T出土の17のみである。おそらく後期後半安行1式期に属するものであると考えられるが、その他の石器については、トレンチ出土・表面探集の土器群が中期後半から後期後半に属することから、この時間幅におさまるものと考えて大過ないと考えられる。

（3）動物遺存体 千葉県立中央博物館 小宮 孟

ア. 資料と方法

峰ノ台貝塚の動物遺存体は、遺跡確認面までの表層調査中に肉眼的に発見した大形資料と、コラムサンプルから水洗分離した資料で構成される。

コラムサンプルは、今回までに確認した3地点の貝層分布範囲に任意に設定した3地点(St. 1, St. 2, St. 3)から採取した(第2図・5図)。採取地点の大きさは一辺約50cmの正方形で、この下位にある堆積物を確認面から5cmずつ厚さで区切って連続的に採取した。したがって、峰ノ台貝塚のコラムサンプルの最小単位は、体積約12,500cm³(=50cm×50cm×5cm)の堆積物である。単位サンプルは上位のものから順に1、2、3の番号を付し、採取地点名と組み合わせて単位サンプル名とした(たとえば、St. 1の最上

位の単位サンプル名はSt. I-1、最下位はSt. I-11である)。なお、St. 3ではサンプル23より下位にある堆積物の採取は物理的に不可能なので、サンプル22で採取作業を中止している。

各単位サンプルは、メッシュ寸法が9.5mm、4.0mm、2.0mm、1.0mm、0.5mmの同規試験フライを用いて水洗分離し、分離物の自然乾燥をまって各メッシュ別に白紙上に薄く伸ばし、肉眼的に識別しうる資料を探集した。

イ. 同定結果

今回までに同定できた動物遺存体は、貝類が腹足類4目11科14種、二枚貝類5目9科16種、頭足類1目1科1種の合計31種、魚類は軟骨魚類1目1科1種、硬骨魚類3目4科4種の合計5種、鳥類は1目1科1種、哺乳類2目3科3種である。以下、資料の採集方法別に概要を記す。

発掘採集した大形資料

貝塚の発掘で最も目立つ貝類遺存体は、コラムサンプルの項で一括記載する。

硬骨魚綱 CHONDRICHTHYES

フグ目 Tetraodontiformes

フグ科 Tetraodontidae

第10トレンチから前上顎骨3点、歯骨1点の合計4点が採集された。計測的には大形に成長するフグ科の顎骨で、おそらくはトラフグ属 *Takifugu* に同定される。コラムサンプルからも相対的に高い頻度で同定されており、当貝塚産魚類相を特徴づける魚類と考えられる。

鳥綱

カモ目 Anseriformes

カモ科種不明 *Anatidae* gen. & sp. indet.

脊椎骨、肢骨などが同定された。8T-001号土坑からまとまって発見された。頭蓋骨は同定できなかつたが、おそらく1体分の全身骨格が土坑内にまとまっていたものと思われる。

哺乳綱 MAMMALIA

クジラ目種不明 *Cetacea* fam. indet.

1Tから胸椎1点が採集された。形態および計測的にはバンドウイルカ *Tursiops truncatus* 級のイルカに同定されるが、科以下の同定は困難である。

偶蹄目 Artiodactyla

イノシシ *Sus scrofa*

1Tから7点、9T、10Tから各1点ずつ合計9点が同定された。いずれも現生種標本よりも全体に大きく頑丈であるが、筆者が扱った房総の繩文貝塚産イノシシの計測範囲内にあり、橈骨と中手骨にはスパイラル骨折がみとめられる。資料番号1T-001(トレンチ一括出土)の左下顎骨は、第2大臼歯が未萌出のまま顎骨内にとどまっている。歯根は未形成で、咬頭は萌出してない。歯槽の一部が新しい破損面で破壊されているので、第2大臼歯歯槽の開らき具合が不明瞭だが、新美¹¹の年齢区分のII-1段階もしくはその直前段階に相当する。そうだとすれば、この個体は冬季の死亡と推定される。

資料番号1T-007(4層出土)の下顎吻端部資料は、左側を第2小白歯遠心根より後方を、右側は第3小白歯近心根より後方を古い破損面で欠損する。左右の第1、第2切歯が残植し、その他の歯はすべて脱落する。犬歯歯槽の頬舌径は最大値で25.8mmである。林らの記載²³を参考にすれば、1T-007の性別は♂と推定される。なお、資料番号001土の距骨破片には、イヌ科のものと思われる噛み痕がみとめられた。

シカ *Cervus nippon*

1Tから4点、5Tから3点、9Tから5点、10Tから2点、H19地点（第13図）から1点の合計15点が同定された。計測的には筆者が扱った縄文貝塚産シカの範囲にあり、肢骨にはいずれもスパイラル骨折面がある。資料番号5T-013（土坑確認面出土 第3図）の角は落角である。資料番号10T-036（貝層検出土）の橈骨遠位内縁には、齧歯類のものと思われる噛み痕があるが、他の同定資料には動物の噛み痕はみとめられなかった。

なお、以上のほかに第10トレンチからはヒトの右大腿骨骨幹破片が出土している。後面の筋稜が発達しており、縄文人骨の可能性があるが、詳細は不明である。

コラムサンプルからの同定資料

コラムサンプルの処理には多くの労力と経費が必要で、まだすべてのサンプルの処理が終了していない。第2表には、St. 1-5サンプルの9.5mmと4.0mmメッシュ面上で分離した貝類遺存体の同定結果を示した。ただし、キセルガイ科Clausiliidaeなどの微小貝のデータは今回は除外してある。

腹足類は軸芯と臍部を保存するもの、二枚貝類は蝶番部を保存するものをそれぞれ集計対象とした。表中には、9.5mmと4.0mmメッシュ分離資料の頻度を区別して示すため、それぞれの成績を+記号をはさんで左側の欄にまとめて示した。また、二枚貝類の左右殻の頻度は/記号をはさんでそれぞれの側に示した。なお、二枚貝類の最小個体数（MNI）は原則的に左右殻のいずれかの多い側の頻度数を用いたが、明らかに計測値の異なるものは別個体と判断した。

この方法によると、St. 1-5サンプルからは少なくとも3022個体の貝類が算定され、貝種別ではイボキサゴ（約43%）、シオフキガイ（約19%）、アサリ（約12%）、マテガイ（約11%）の順に頻度が高い。

一方、この表の右欄には、9.5mmと4.0mmメッシュ面上の分離物から採集した貝類資料の同定結果を上と同じ方式で重量別に示した。9.5mmメッシュ面上で分離される貝塚産貝類は破片資料でも比較的種同定が容易なので、可能なかぎり分類して計量した。この方法によると、2枚のメッシュ面上で分離した貝類資料

第2表 貝類遺存体同定結果 (St.1-5 9.5 mmメッシュ+4.0 mmメッシュ)

| | 同定種度 | | 重量 (g) | |
|--|-----------------|----------------------------------|-------------|--------------|
| | 9.5mm+4.0mm | 最小個体数 頻度 (%) | 9.5mm+4.0mm | 最小個体数 頻度 (%) |
| イボキサゴ <i>Umbraculum (Sachium) maculiferum</i> | 617+687 | 1304 43.2 417+810.2 626.0 | 5.6 | |
| アフニナ <i>Semisulcospira libertina</i> | 1+3 | 4 0.1 0.4+0.9 1.3 0.0 | | |
| ワニナ属 <i>Bellularia</i> sp. | 2+12 | 14 0.5 2.8+4.6 7.4 0.1 | | |
| ツブツガイ <i>Glossularia difformis</i> | 71+12 | 21 0.7 302.3+— 302.3 2.7 | | |
| ホノヤマツガイ <i>Glossularia hemisphaerica</i> | 40+0 | 40 1.3 327.3+— 327.3 2.9 | | |
| ツバツガイ属 <i>Glossularia</i> sp. | 4+0 | 4 0.1 22.0+— 22.0 0.2 | | |
| アカニシ <i>Rapana venosa</i> | 10+0 | 10 0.3 293.0+— 293.0 2.6 | | |
| アラレロガイ <i>Reticularia festiva</i> | 1+27 | 28 0.9 0.3+0.0 8.3 0.1 | | |
| ハマツ <i>Balanus japonicus</i> | 9+0 | 9 0.3 153.0+— 153.0 1.4 | | |
| イセガキツガイ <i>Chelyosoma</i> sp. | 1+0 | 1 0.0 17.9+— 17.9 0.2 | | |
| ヒダリツガイ <i>Euhadra punctata</i> | 6+12 | 18 0.6 13.0+1.5 14.5 0.1 | | |
| サルガツガイ <i>Sophularia subcrenata</i> | 15+15+0/0 | 15 0.5 378.9+— 378.9 3.4 | | |
| サクツガイ <i>Sophularia</i> sp. | 1/1+0/0 | 1 0.0 8.5+— 8.5 0.1 | | |
| マガツ <i>Ctenostoma gigas</i> | 0/2+0/0 | 2 0.1 18.4+— 18.4 0.2 | | |
| イシガイ科種不明 <i>Unionidae</i> gen. & sp. indet. | 0/0+0/1 | 1 0.0 —+0.4 0.4 0.0 | | |
| ハゼガイ <i>Mactra sinensis</i> | 5/12+3/1 | 13 0.4 88.4+1.2 89.6 0.8 | | |
| シオフキツガイ <i>Mactra quadrangularis</i> | 367/395+228/187 | 587 19.4 1701.7+49.1 1790.8 15.8 | | |
| レタケツガイ <i>Tegula leucostoma</i> | 0/1+0/0 | 1 0.0 182.4+— 182.4 1.6 | | |
| シタリツガイ属 <i>Murex</i> cf. <i>costulatula</i> | 2/1+1/0 | 3 0.1 2.1+0.1 2.2 0.0 | | |
| ツバツガイ <i>Cerithium</i> sp. | 24/5+108/114 | 322 10.7 36.7+43.1 79.8 0.7 | | |
| シジミ属 <i>Cerithidea</i> cf. <i>spinosissima</i> | 1/1+0/0 | 1 0.0 1.4+— 1.4 0.0 | | |
| カガミツガイ <i>Cerithidea</i> cf. <i>spinosissima</i> | 50/1+1/1 | 27 0.6 60.9+1.4 62.7 0.6 | | |
| アホ <i>Ruditapes philippinarum</i> | 301/293+66/72 | 367 12.1 2032.0+39.5 2071.5 38.7 | | |
| オキアリ <i>Gomphina (Marinidius) aquilonaria</i> | 7/3+2/2 | 7 0.2 18.4+0.8 19.2 0.2 | | |
| ハゼツガイ <i>Morifusca</i> sp. | 165/162+8/11 | 178 5.9 1618.2+9.5 1623.7 14.6 | | |
| オキツガイ <i>Cerithidea sinensis</i> | 5/3+1/0 | 2 0.1 5.4+0.1 5.5 0.1 | | |
| オオノガイ <i>Macromesistius elongatus</i> | 21/16+26/9 | 41 1.4 87.9+1.8 96.5 0.9 | | |
| コロコロ <i>cf. Scissula</i> sp. | 2+4 | 1 0.0 2.0+0.0 0.0 0.0 | | |
| 種不明破片資料 <i>unidentified fragments</i> | | 307.8+197.9 2371.7 21.4 | | |
| 合計 | | 3022 99.8 11103.8 100 | | |

の総重量は約11kgで、その約21%が同定の困難な破片資料が占めたが、貝種別ではアサリ(約19%)、シオフキガイ(約16%)、ハマグリ(約15%)の順に重量が高い。MNI比較では全体の半数近くを占めたイボキサゴが、重量比較では全体の約6%を占めるにとどまっている。

以下に、サンプルから分離された特徴的な貝類について記載する。

中腹足目 MESOGASTROPODA

ツメタガイ属 *Glassaulax*

当貝塚のツメタガイ属は、溝で2分された臍索の上葉が下葉よりも大きく、臍孔をふさぐタイプと、両葉の大きさが等しいタイプの2型に分類される。前者をホソツメタガイ *Glassaulax hosyai*、後者をツメタガイ *Glassaulax didyma*に同定した。現生のホソツメタガイはやや外洋性の性質をおびるが、今回のサンプルにおける同定頻度は内湾性のツメタガイよりも高い。

イモガイ科種不明 Conidae gen. & sp. indet.

摩滅と破損が著しく、漂着死貝と考えられる。殻表に穿孔虫の生痕がある。ベッコウイモガイ *Chelyconus fulmen*に似るが、種レベルの同定は困難である。筆者がこれまで扱った貝塚産資料をみるかぎりでは、縄文人は混獲した死貝を現場で選り分けていると推定されるが、この貝殻は集落まで搬入している。

フネガイ目 ARCOIDA

サルボウガイ *Scapharca subcrenata*

9.5mmメッシュ面だけで分離された。本種は房総の縄文貝塚からしばしば報告されるが、今回のサンプル中に出現した殻長範囲は40.5~82.2mmで($M \pm SD = 56.9 \pm 10.9$)、最大値は現生種よりも大きい。東京湾奥部や内陸の縄文貝塚からは、貝輪などに加工されたこの級のサルボウガイがしばしば報告されるが、当貝塚からはいまのところ加工痕のあるものは同定されていない。

マルスダレガイ目 VENEROIDA

シオフキガイ *Mactra quadrangularis*

既述のように、本種は当貝塚の主要貝層構成員の一つに見込まれる。St. 1~5サンプルにおける9.5mmメッシュ面の分離資料の殻長は21.7~51.2mmの範囲にあって、平均は約37mmである($M \pm SD = 36.7 \pm 7.0$)。殻長分布は37.5~40.0mmに最頻値をもつ正規分布型に近いが、25.0~27.5mm付近にも小さな頻度の高まりがある(第12図)。今回のサンプルでは、本種の約40%が9.5mmメッシュ面を通過していると見込まれるが(第2表)、4.0mmメッシュ面で分離された資料の大部分は推定復原殻長が25~30mmの範囲を最頻値とする破片資料である。したがって、これらを加算したSt. 1~5サンプルにおける本種の推定殻長組成は、殻長30mmと40mm付近に最頻値をもつ双峰型か、30~40mmの間に最頻値をもつ单峰分布になると予想される。

ミルクイガイ *Tresus keenae*

前縁部から腹縁部を古く鋭い断面で破損した右殻が同定された。殻は厚く、側歯は細めで、外套線が深く湾入する。推定復原殻長は170mm前後に達する。現生種は北海道~九州、朝鮮半島の潮間帶下部から水深20mの泥底に生息し、殻長16cm前後に成長する。殻の表面には、漂流などによる磨耗の痕跡や人為的な加工痕はみとめられない。

アサリ *Ruditapes philippinarum*

本種はシオフキガイと並んで、当貝塚の主要貝層構成員の一つに見込まれている。9.5mmメッシュ面上の分離資料の殻長平均は約38mmで($M \pm SD = 37.6 \pm 5.6$)、殻長分布は37.5~40.0mmに最頻値をもつ正規分布となる(第12図)。今回のサンプルでは、本種の約20%が9.5mmメッシュ面を通過したと考えられるが、4.0

mmメッシュ面上における分離資料の主体は推定殻長35~40mm前後の個体破片である。したがって、このサンプルにおけるアサリの推定殻長組成は、4.0mmメッシュ面上の破損資料を加えても第12図に近似した正規分布になると予想される。

ハマグリ *Meretrix lusoria*

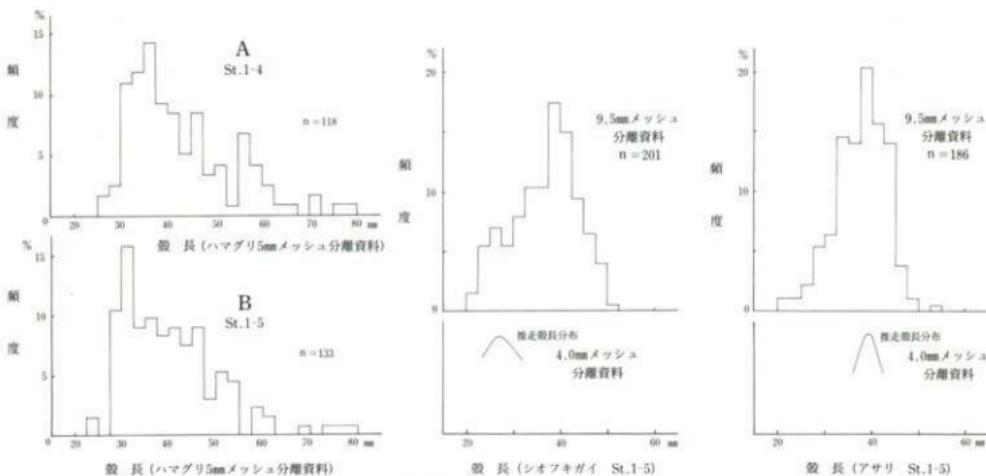
観眼的には本種は当貝塚の貝層構成員種として最も目立つ貝種である。9.5mmメッシュ面上の分離資料の殻長平均は40mmで($M \pm SD = 40.4 \pm 10.4$)、殻長分布は第12図Bのような殻長30.0~32.5mmに最頻値をもつJ字分布に近く、50mm付近にも小さな頻度の高まりがある。このサンプルにおける殻長の最小値は24.7mm、最大値は76.1mmである。今回のサンプル中の本種は、9.5mmメッシュ面上でほとんど分離されたと判断しうるので(第2表)、第12図BがSt. 1-5サンプルにおけるハマグリの殻長組成を示すと考えてよい。なお、第13図AはSt. 1-5の上位にあるSt. 1-4サンプルにおける9.5mmメッシュ面上の分離ハマグリの殻長分布である。最頻値の階級などに若干の違いがあるが、St. 1-5サンプルと同様に裾の長いJ字分布に近く、55mm付近に小さな頻度の高まりがみられる。

ウ. 考察

動物相の特徴

今回の同定結果から峰ノ台貝塚全体の動物相を復原するのは困難である。しかし、大形フグの骨が貝層の広い範囲に大量に堆積している可能性が高いことは、峰ノ台貝塚の動物相の特徴の一つとして注目される。今回同定したトラフグ属をはじめフグ科魚類の内臓や皮などにはtetrodotoxinと呼ばれる致死性の毒が含まれており、食用にするためには毒を回避する知識や調理技術が必要である。

これまでフグの骨が大量に同定された縄文遺跡としては、茨城県大宮台貝塚³⁾(後期)、千葉県大倉南貝塚⁴⁾(後期)、茨城県冬木貝塚⁵⁾(後期)、茨城県藤井貝塚(後期:小宮、未刊)などが知られている。これらはいずれも縄文時代後期の遺跡で、霞ヶ浦・利根下流水系を中心に地理的なまとまりを形成する。峰ノ台



第12図 殻長分布図

貝塚はこの地域から地理的に離れているが、これらの貝塚群と同時代の遺跡で、同じようにフグ毒を回避できる集団が残した遺跡と考えられ、今後は、両者の系統関係の解明や周辺遺跡との比較検討が必要と思われる。

貝類相の復原

発掘現場で最も目立った貝類は、ハマグリ、アサリなどの二枚貝であるが、St. 1-5 のサンプルから分離した資料をMNI基準で分類すると、イボキサゴ1種が全体の約半数近くを占め、これについてシオフキガイ、アサリ、マテガイの頻度が高くなることが明らかである。しかし、同じサンプルを重量別で分類すると、ハマグリがイボキサゴやマテガイよりも上位を占め、アサリ、シオフキガイとともに主要構成貝として評価され、現場でうけた印象に近い貝類相に復原される（第2表）。

一般に大きさの異なる大小の貝殻が堆積する貝塚貝層では、貝殻の大きいものや殻質が厚く壊れにくいものが目につきやすい。上記の2つの方法による同定結果の違いは、このことの反映と考えられる。しかし、マテガイは全体の大きさのわりに殻質が薄く壊れやすいので、データ集計には慎重さが要求される。今回扱ったSt. 1-5 サンプルでも同定したマテガイの約98%が9.5mmメッシュ面を通過しており（第2表）、重量表示でも実際の堆積量よりも相当少なく表現されている可能性が高い。

ところで、貝塚の貝類相復原の意味は、その生態的特徴の解析をつうじて、縄文人がどのような性質の貝を選択的に利用していたかという狩猟採集生活の集約的側面を復原することにあると理解される。その意味では、淡水域～内湾砂泥底の潮間帯までの広い水域に生息する貝の集合体であるSt. 1-5 の貝類相が、MNI基準でも重量基準でも内湾の干潟に生息する貝が圧倒的な優占種として評価されることの意義は大きい。すなわち、このような同定結果にもとづくかぎりでは、峰ノ台縄文人の貝類に対する関心は、集落近くにある淡水域ではなく、もっぱら東京湾の干潟に向いていたと理解されるからである。

St. 1-5 における堆積物1,000cm³あたりの高い貝類密度（約888g/1,000cm³）を考慮すると、この集団では、干潟での集約的な採貝活動が重要な年中行事の一つだった可能性が高い。採貝対象となった主な貝は干潟から水深約10mまでの浅海の底質に浅く潜入している二枚貝であるが、大形のオオノガイヤマテガイなどのように底質に深く潜入する二枚貝も少なからず含まれている。また、後述のように主要二枚貝の殻長組成も多様であることから、多くの老若男女が干潟に集まり、さまざまなスタイルの潮干狩りが展開したものと推定される。

主要二枚貝の殻長組成

筆者は縄文貝塚産貝類の殻長組成は、基本的には正規分布になると想っていたが、実際の殻長組成は貝種の違いや遺跡の地域性、年代の違いなどによってかならずしも一様でないことが明らかになりつつある⁶⁾。St. 1-5 サンプルの重量表示で主要貝に評価されたアサリ、シオフキガイ、ハマグリの3種の推定殻長組成が、それぞれスタイルの異なる3型に復原されたことは、採貝対象の違いによって漁具や漁場などが使い分けられていた可能性を示唆するものと思われる。

4 表面採集の状況

トレンチ調査・表面採集によって得ることのできた土器の分類・集計を第3表に表した。Tはトレンチの略、Hは表面採集の略である。単位は重量gで表示した。面積とは表面採集を行った各地点の面積である。現況とは、表面採集地点の状態である。耕作機械による天地返し直後の状態で、表面採集の障害となる耕作物が全くない地点をA、耕作物が畠上に栽培されており、主として畠間のみの表面採集が可能であ

った地点をB、休耕により全面が荒蕪地となり、草木により表面採集が困難であった地点をCと記した。なお、表面採集を行った各地点の範囲は第13図に示した。

土器の分類基準については、1類は加曾利E I・II式土器及びこれらに伴う若干の曾利式土器である。量的にはE II式土器が大多数を占める。2類は加曾利E III・IV式土器及びこれらに伴う若干の曾利式土器である。E III式土器であるかE IV式土器であるかを明瞭に区別できるほどの大形の破片は少なく、両者の比率は不明である。1 or 2類は、1類であるか2類であるかの判断がつかない土器である。主としてE II式期もしくはE III式期に伴うキャリバー形土器の破片である。1 + 2類は、上記3分類のすべてを加算したもので、中期に属する土器である。3類は称名寺式土器である。4類は堀ノ内1式土器である。5類は後期のうち、堀ノ内2式期以降に属する土器である。本来ならば、土器型式ごとの分類項目を設定することが望ましいが、トレンチ調査・表面採集により得られた土器片は小破片が主体であり、細かな分類項目に耐えうる破片がごく少量となってしまうことから、一括した分類項目を設定した。その他とは主に土器片錐や早・前期に属する小破片である。

各類の構成比の分母は合計の重量で、単位は%である。各類の相対重量とは、表面採集の地点ごとに面積の相違があるため、地点ごとの面積(m²)を算出し、100m²当たりの出土重量gを算出したものである。

表面採集の成果(第3表)は、本来ならば詳細に分析し台地上での居住域等の状況を類推すべきであるが、今回はあくまで基礎資料の提示にとどめたい。

- 注1 新美倫子 1991 「愛知県伊川津遺跡出土ニホンイノシシの年齢及び死亡時期査定について」『国立歴史民俗博物館研究報告29』
- 2 林 良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂 1977 「日本産イノシシの歯牙による年齢と性の判定」『日本獣医学雑誌39』
- 3 池上啓介 1931 「常陸國麻生大宮臺貝塚調査報告」『史前学雑誌3(4)』
- 4 西村正衛・金子浩昌 1956 「千葉県香取郡大倉南貝塚」『古代21・22』 早稲田大学考古学会
- 5 赤澤 威・小宮 孟 1981 「冬木貝塚産魚種組成と漁撈活動」『冬木地区土地区画整理事業地区内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団
- 6 小宮 孟 1989 「貝類および住居跡の灰サンプル出土の脊椎動物遺存体」『千葉市小中台(2)遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』 (財)千葉県文化財センター



第13図 表面採集地点範囲

第3表 出土土器集計

| T/地点 番地/m ² | 状況 | 量(回) | | | | | | | | | | 構成比 | | | | | 相対重量(/0.00m ²) | | | | | | | | |
|---------------------------|-------|------|-------|-------|-------|-----|-------|-----|--------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|----------------------------|-------|-------|------|------|------|-------|------|--|
| | | 1回 | 2回 | 1or2回 | 1+2回 | 3回 | 4回 | 5回 | 平均 | その他 | 合計 | 1回 | 2回 | 1+2回 | 3回 | 4回 | 5回 | 1回 | 2回 | 1+2回 | 3回 | 4回 | 5回 | | |
| 17 | | 690 | 1,150 | 3,330 | 5,170 | 250 | 710 | 520 | 11,010 | 180 | 17,840 | 3.9% | 6.4% | 29.0% | 1.4% | 4.0% | 2.9% | | | | | | | | |
| 27 | | 0 | 0 | 60 | 60 | 0 | 40 | 210 | 350 | 0 | 660 | | | | | | | 6.1% | 31.6% | | | | | | |
| 37 | | 0 | 120 | 0 | 120 | 190 | 220 | 80 | 590 | 40 | 1,150 | 10.4% | 10.4% | 8.7% | 18.1% | 7.0% | | | | | | | | | |
| 47 | | 0 | 60 | 90 | 150 | 70 | 190 | 50 | 760 | 110 | 1,240 | 4.9% | 12.1% | 5.9% | 8.1% | 4.0% | | | | | | | | | |
| 57 | | 920 | 490 | 860 | 2,270 | 160 | 280 | 180 | 4,490 | 0 | 7,290 | 12.6% | 6.7% | 21.1% | 2.2% | 3.8% | 2.5% | | | | | | | | |
| 57 | | 0 | 60 | 0 | 60 | 60 | 60 | 0 | 240 | 0 | 510 | 2.7% | 2.7% | 2.7% | 2.7% | 2.7% | 2.7% | | | | | | | | |
| 77 | | 0 | 0 | 130 | 130 | 0 | 60 | 490 | 570 | 0 | 2,540 | 5.3% | 2.1% | 3.1% | 19.2% | | | | | | | | | | |
| 87 | | 0 | 130 | 0 | 130 | 0 | 50 | 90 | 540 | 0 | 930 | | | | | | | 4.9% | 9.3% | | | | | | |
| 97 | | 450 | 1,290 | 950 | 2,690 | 190 | 1,380 | 100 | 7,130 | 130 | 11,620 | 3.9% | 11.1% | 23.1% | 1.6% | 11.9% | 0.9% | | | | | | | | |
| 107 | | 220 | 480 | 140 | 840 | 70 | 1,470 | 840 | 18,230 | 40 | 17,490 | 1.3% | 2.7% | 4.8% | 0.4% | 8.4% | 4.8% | | | | | | | | |
| 117 | | 0 | 0 | 40 | 40 | 0 | 0 | 40 | 290 | 0 | 370 | | | | | | | | | | | | | | |
| 127 | | 0 | 120 | 80 | 250 | 70 | 160 | 440 | 4,440 | 0 | 5,510 | 2.2% | 3.6% | 1.3% | 2.9% | 8.5% | | | | | | | | | |
| 137 | | 20 | 920 | 460 | 1,400 | 290 | 320 | 170 | 8,510 | 0 | 8,690 | 0.2% | 10.6% | 16.1% | 3.3% | 3.7% | 2.0% | | | | | | | | |
| 147 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 70 | 70 | 260 | 0 | 440 | | | | | | | 15.9% | 15.9% | | | | | | |
| 157 | | 0 | 0 | 40 | 40 | 0 | 0 | 150 | 1,000 | 0 | 1,190 | | | | | | | 3.4% | | | | | | | |
| 167 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 100 | 0 | 170 | 370 | 0 | 640 | | | | | | | 15.6% | 26.6% | | | | | | |
| 出土壤 | | 0 | 370 | 360 | 730 | 6 | 2,510 | 760 | 2,930 | 0 | 6,030 | 6.1% | 12.1% | 41.6% | 12.6% | | | | | | | | | | |
| H1 | 239 | C | 0 | 0 | 130 | 130 | 0 | 130 | 130 | 0 | 1,050 | | | | | | | 7.9% | 7.9% | 7.9% | 7.9% | 54.4 | 54.4 | 54.4 | |
| H2 | 207 | B | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 50 | 50 | 560 | 0 | 690 | | | | | | 7.2% | 11.6% | | | 24.2 | 38.6 | | |
| H3 | 198 | B | 0 | 0 | 0 | 80 | 80 | 0 | 70 | 80 | 330 | 0 | 560 | | | | | 12.5% | 14.3% | | | 40.4 | 40.4 | | |
| H4 | 462 | B | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 50 | 50 | 260 | 0 | 260 | | | | | | 19.2% | | | | 12.3 | | |
| H5 | 784 | C | 0 | 0 | 60 | 60 | 0 | 400 | 400 | 6,000 | 0 | 9,510 | 0.6% | 4.2% | 4.2% | 4.2% | 4.2% | | | | | 51.0 | 51.0 | | |
| H6 | 310 | B | 0 | 60 | 40 | 100 | 50 | 120 | 120 | 0 | 1,150 | 5.1% | 4.5% | 4.3% | 7.7% | 7.7% | | | | | 7.7 | 7.7 | | | |
| H7 | 707 | C | 130 | 150 | 220 | 500 | 90 | 220 | 540 | 5,870 | 40 | 8,360 | 1.6% | 6.5% | 1.1% | 2.6% | 7.7% | 18.4 | 21.2 | 70.7 | 12.7 | 31.1 | 90.5 | | |
| H8 | 330 | B | 0 | 70 | 60 | 130 | 0 | 0 | 160 | 1,020 | 0 | 1,210 | 5.3% | 9.9% | | | | 12.2% | | | | 21.2 | 39.4 | 8.0 | |
| H9 | 555 | B | 0 | 160 | 40 | 200 | 60 | 200 | 600 | 3,560 | 0 | 4,670 | 3.5% | 4.3% | 1.3% | 13.0% | | 28.8 | 36.0 | 10.8 | | 36.0 | 108.1 | | |
| H10 | 485 | B | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 70 | 250 | 0 | 320 | | | | | | 21.9% | | | | | 14.4 | | |
| H11 | 624 | B | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 50 | 340 | 0 | 390 | | | | | | 12.6% | | | | | 8.0 | | |
| H12 | 672 | B | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 100 | 460 | 0 | 560 | | | | | | 17.9% | | | | | 14.9 | | |
| H13 | 202 | B | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 80 | 60 | 220 | 0 | 360 | | | | | | 22.2% | 16.7% | | | | | 39.6 | |
| H14 | 988 | A | 0 | 80 | 80 | 140 | 0 | 0 | 870 | 3,090 | 0 | 3,900 | 1.5% | 3.6% | | | | 17.2% | | | | 6.1 | 14.2 | 67.8 | |
| H15 | 1,631 | A | 0 | 60 | 120 | 170 | 90 | 200 | 960 | 0 | 10,530 | 0.6% | 14.2% | 0.9% | 2.8% | 9.3% | | | 3.7 | 10.4 | 5.5 | 16.4 | 58.8 | | |
| H16 | 1,049 | A | 2 | 200 | 180 | 120 | 120 | 260 | 4,950 | 0 | 6,650 | 4.2% | 2.3% | 14.2% | 1.8% | 2.4% | 4.9% | 53.2 | 32.7 | 26.9 | 26.9 | 56.0 | | | |
| H17 | 845 | B | 50 | 120 | 120 | 280 | 60 | 100 | 1,230 | 0 | 1,130 | 1.6% | 2.0% | 1.2% | 2.6% | 1.5% | 5.9 | 2.2 | 2.2 | 2.2 | 1.8 | 1.8 | | | |
| H18 | 479 | C | 80 | 170 | 150 | 400 | 120 | 120 | 80 | 2,340 | 0 | 2,960 | 2.6% | 5.6% | 13.1% | 2.9% | 2.9% | 16.7 | 35.5 | 83.5 | 25.1 | 25.1 | 16.7 | | |
| H19 | 383 | C | 70 | 110 | 170 | 350 | 80 | 730 | 80 | 5,700 | 0 | 7,940 | 0.9% | 1.0% | 4.4% | 1.0% | 0.9% | 1.0% | 18.3 | 28.7 | 94.4 | 20.9 | 190.6 | 20.9 | |

III まとめ

今回の調査で確認することができた貝塚の堆積状況と出土土器群から、各貝塚の形成時期について述べておきたい。

A貝塚 9Tで確認された貝層（A貝塚下部）と10Tで確認された貝層（A貝塚下部）からなる。A貝塚下部は、貝層下の11層から加曾利E II式土器（第7図52～57）がまとまって出土している。貝層（10層）下半からは称名寺1式期の土器（49）が出土している。このことからA貝塚下部の形成時期は中期終末以降であることが考えられる。形成の上限を示す資料には恵まれないが、10Tの8層は明らかにA貝塚下部より新期の堆積であり、称名寺1式土器・堀ノ内1式土器（67・68）が出土していることから、A貝塚下部は中期終末から後期初頭を中心とする時期の比較的短い期間に形成されたことを予想することができよう。A貝塚上部は貝層出土土器（69・70）が目安となろう。69は堀ノ内2式土器もしくは加曾利B1式土器で、70はおそらく加曾利B1式土器である。貝層検出面出土土器（59～66）は堀ノ内1式土器（新段階）から加曾利B1式土器の可能性のある土器であり、貝層出土土器との時間的な齟齬は認められない。明瞭に加曾利B2式期以降の破片は認めないので、A貝塚上部の貝層形成の下限は後期中葉を中心とする時期と考えられよう。貝層形成の下限については貝層を掘り抜くことができなかつたので不明であるといわざるを得ないが、A貝塚下部が後期初頭を中心とする時期の比較的短い期間に形成されたと考えられることから、おそらく後期前半堀ノ内1式期に貝層の形成が始まった可能性が高いと考えられる。

B貝塚 1Tの貝層中・コラムサンプル内からは堀ノ内2式土器（1～13）がまとまって出土している。貝層上部の9層やコラムサンプル下半（St. 1～7）からも出土していることから、B貝塚の堆積は堀ノ内2式期に限定することができよう。St. 1の貝層下から堀ノ内1式土器（14）が出土していることからもこの状況をうかがうことができよう。

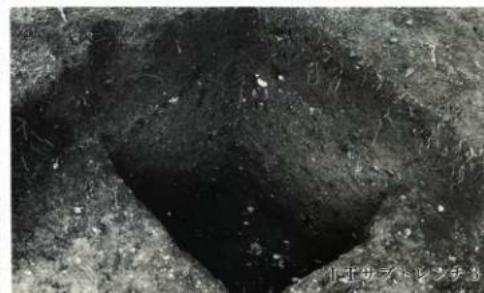
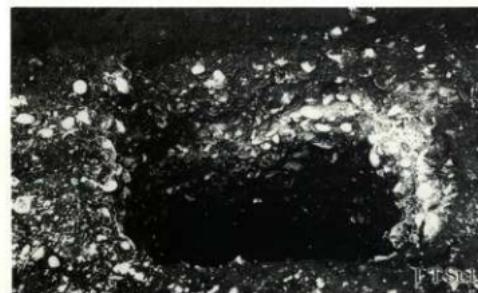
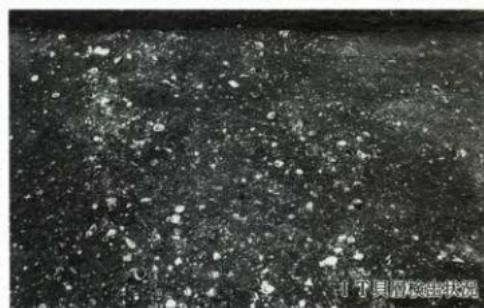
C貝塚 トレンチ調査を行えなかった貝塚であるが、採集した土器（77～93）や集計（第3表）から、堀ノ内1式土器が量的に突出することがうかがえ、後期前半を中心とする時期に形成されたと考えることができよう。

峰ノ台貝塚の3地点の貝塚は、後期初頭（A貝塚下部）・後期前半（B貝塚・C貝塚）・後期前半～後期中葉（A貝塚上部）の形成であることが判明した。後期初頭に伴う遺構としては8T001土坑が検出されたのみで、いずれの時期も居住域を確認することはできなかつた。後期初頭の集落は規模が小さく、散発的に住居跡が検出される例が多いことから今回のトレンチ調査では補足できなかつたと考えられる。後期前半の住居跡は、特に堀ノ内1式期では斜面部に集中して設営される例が多く、今回のトレンチ調査が貝塚部分と台地平坦面を中心に設定したことから、明確に把握できなかつたと考えられよう。後期中葉の住居跡は、下総台地においては床面がローム層にまで達する例が少なく、竪穴住居跡として認識できる例が少ない。峰ノ台貝塚では台地平坦面上が古くから整形され、近年の大型耕作機械により、作土直下がローム層である地点が多く、後期中葉の住居の多くは削平されてしまったと考えられる。6Tでの後期後半の安行1式期の住居跡の検出や、5Tでの中期後半の遺構の重複を捉えることができたが、台地全体の中での展開を把握するにはいたらなかつた。しかしながら、A貝塚・B貝塚の平面的な規模や層厚から勘案すると、後期前半から後期中葉の大規模な集落が存在していたことが予想される。また、安行1式期の住居跡に伴う貝塚も、今回の調査で把握できなかつた可能性も否定しきれない。地元住民によると、台地東側斜

面部の崖面に湧水点が存在していたそうである。現在では湧水は確認できないものの、大規模集落の設営に不可欠な要素を認めることができた。このように考えると峰ノ台貝塚の全容は、今回の成果のみからでは推し量り得ない内容を有している可能性が高いと考えられる。今回基礎資料として提示した表面採集の土器群の分析と合わせて、台地上での土地利用変遷史の解明を今後の検討課題としておきたい。

写 真 図 版





図版3



2丁



5丁



5 甘鹿骨出土状況



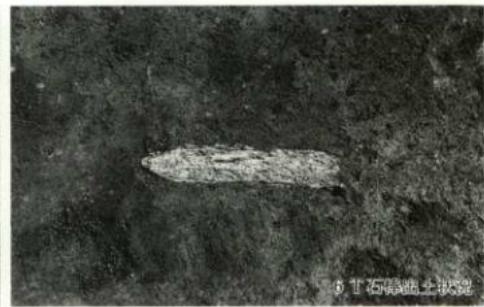
6丁



6 トス回部



6丁土器出土状況



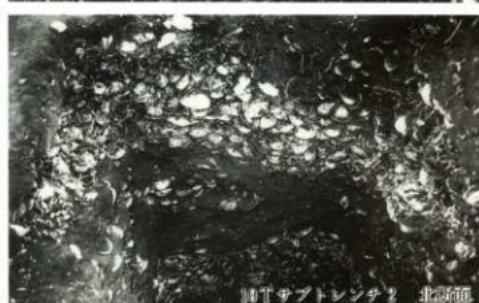
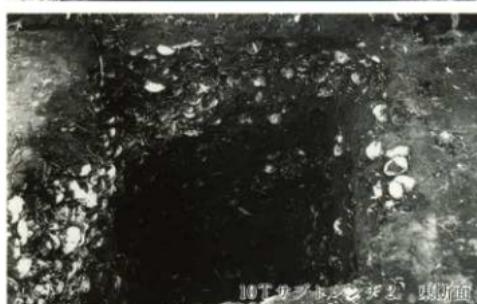
6丁石器出土状況



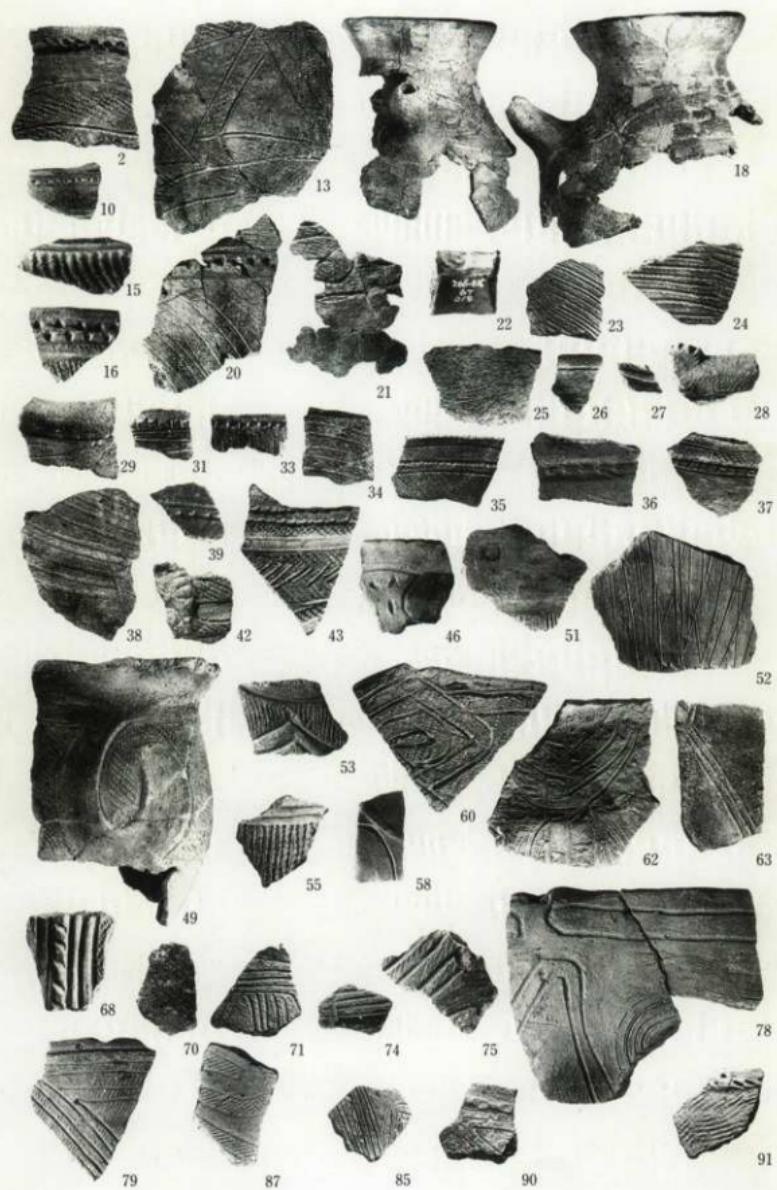
7丁



8丁 001土坑

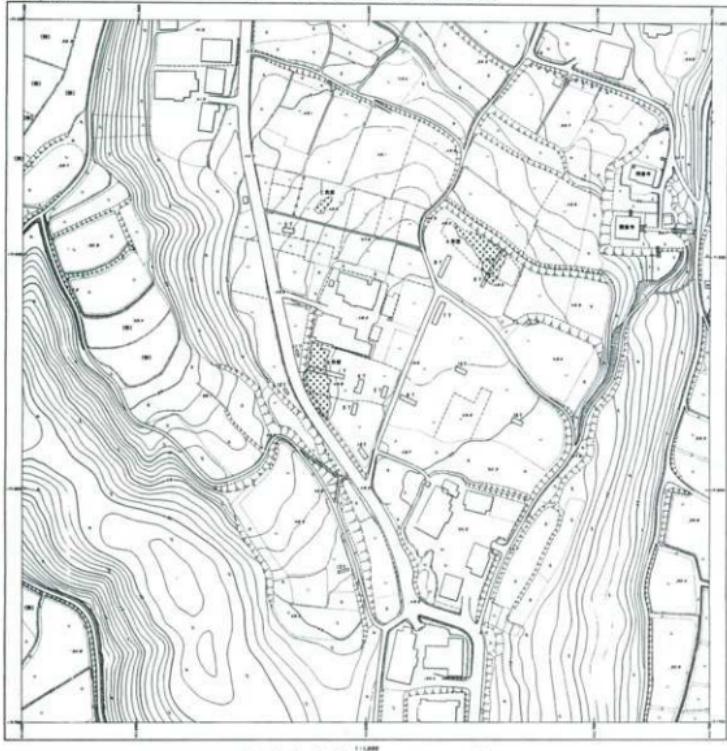


図版5



峰ノ台貝塚 地形測量図

1:1,000



報告書抄録

| | | | | | | | |
|--------|------------------------------|--|--|--|------------------|--|--|
| ふりがな | きさらづしみねのだいかいづかはっくつちょうさほうこくしょ | | | | | | |
| 書名 | 木更津市峰ノ台貝塚発掘調査報告書 | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 千葉県文化財センター調査報告 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第344集 | | | | | | |
| 編著者名 | 加納 実 | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 千葉県文化財センター | | | | | | |
| 所在地 | 〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809番地の2 | | | | Tel 043-422-8811 | | |
| 発行年月日 | 西暦 1998年5月12日 | | | | | | |

| ふりがな 所取遺跡名 | ふりがな 所 在 地 | コ ー ド | 北 緯 | 東 経 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|---------------|----------------------|-------|-------------------|--------------------|---|------------------------|-------------------------------------|
| 峰ノ台貝塚 | 千葉県木更津市 矢那4,167ほか | 12206 | 35度 21分 21秒 | 139度 57分 40秒 | 19971001 ～ 19971031 | 200 | 国庫補助 事業による学術調査 |
| 所取遺跡名 | 種 別 | 主な時代 | 主 な 遺 構 | 主 な 遺 物 | 特 記 事 項 | | |
| 峰ノ台貝塚 | 貝塚 | 縄文 | 地点貝塚 土坑 住居跡 | 3地点 4基 5軒 | 縄文式土器（中期・ 後期） 石器（石鎌・石錐・ 磨製石斧・石劍・石 刀） 土製品（滑車形耳飾 り） | | 後期の地点貝塚3地 点を確認後期安行1 式期の住居跡を検出 |
| | | 古代 | 住居跡 | 4軒 | 土師器・須恵器 | | |

千葉県文化財センター調査報告第344集
木更津市峰ノ台貝塚発掘調査報告書

平成10年5月12日発行

発 行 財團法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 弘 文 社
市川市市川南2丁目7番2号

本報告書は、千葉県教育委員会の了承を得て
増刷したものです。